

文字の形態と進化

(文字の意味論 2)

古 屋 俊 彦*

(2001年 1 月15日受付, 2001年 1 月24日改訂)

Form and Evolution of the Letters

(Semantics of the Letters 2)

TOSHIHIKO FURUYA*

Synopsis: The participation of the language in the letters is extremely indistinct. It is unable to say that the borderline between the letters and the non-letters in the artificiality is determined by the language. The linguistic reading in the past letters is already excess. The principal condition of the letters is the condition of writing without reading. The linguistic writing is the convergence in one direction to the letters. The letters erase the language as a activity to the linearity. The letters are therefore excessively standardized. The phonetic language functions with the simultaneous compound of the distinctive features, so it isn't linear. The linguistic sign functions with the multiplication of the relationships, so it doesn't have to be linear. The something correspond to the linguistic linearity is a single position of speakings. It is the linearity between sender and receiver, the language which depend upon the side of receiver can't include this linearity. The language therefore always goes away from this fictive linearity. The internal script lines of the letters are the perfect exchanges with the linguistic activity. The script lines get together, and build the integrated areas. When the two tips of lines became two connection points, the chain-structure is realized. In fact the connection points are borrowed from two ruled lines. The longhand letters unify internaly the extentions of two ruled lines. The unified single connection line compounds the integrations of script lines in the linearity, so the linear pictograph is realized. The equilibrated condition of the convergence and divergence of the language is sealed up in the linearity by the letters. The letters therefore have independently the form of the linearity. And the evolution of the letters is included in the excessive extension of linearity beyond language.

1. ま え が き

文字は固定性である限りに於いて、そのもの自体に意味がないのは明らかであるが、その全体が固定された枠組みであるとも言えない。文字は全体として常に付加されるものであり、そのため文字の集積とその動機付けについて考察せざるを得ないのである。だからと言って、文字は特定の領域的な意味を形成するためにその意味の文脈として構築されると考えるべきではない。意味は、固定性一般にとっても、また活動体内部の単位の諸階層にとっても、活動体としての言語の段階的な自足的消去の過程にしかあり得ないからである。つまり、固定性としての

* 情報科学センター
Center for Information Science

文字の構築には、意味は表立った役割を持っていないということである。そして、活動体の単位が、意味の文脈へと消費される機能と全く等価であるとしても、その単位から派生したものと見なされた痕跡の固定性は、その様な機能に対して圧倒的に過剰であることに常に注意すべきなのだ。その過剰性は、活動体としての言語に対する分析そのものの内部に、段階的な理論上の保留を許している。そのため、元々言語的な書き込みの任意性や党派性でしかなかったものが、言語分析の根拠へと逆転写されるのである。この論考では、文字と意味との逆説的な関係を前提として、文字の形態と進化の独自性について論じる。

2. 人為性と線状性

2.1 文字と非文字

固定性としての文字の単位は消極的な同一性でしかなく、それは活動体としての言語から一方的に書き込まれた痕跡として成立する。消極的な同一性は制度として体系化することもなく、単位とは言っても機能との交換関係を活動体としての言語の中にしか持つことはない。文字の単位は、それ故、惰性的で不確定な領域を呈するのみである。固定性としての文字は、その起源の先史的な極限に遡ったとしても、即ち人間の原初的な図示表現に至るまで、そのような言語的書き込みとしてしか存在しないことがはっきりしている。もしも言語的でない図示表現を想定してしまうと、人為的な痕跡と非人為的な痕跡とを区別すること自体が意味を無くしてしまうのである。先史学者のアンドレ・ルロワ＝グーランは、先史時代の最古の書き込みである紀元前三万五千年頃の図示表現と、その後の紀元前八千年頃までの象形芸術の変遷を比較し、図示表現が忠実な模写から始まったのではなく、様式化された抽象表現から長い時間をかけて現実主義的な描写へと移行したことを指摘し、図示表現は元々言語活動に直接結び付いていたと考えるのが自然であると結論付けた^(脚注1)。ルロワ＝グーランがその際に言語活動の主要な機能として前提しているのは抽象化の機能であり、その機能を持つに至る能力の飛躍が図示表現の人為性を確固たるものにしていると考えられる^(脚注2)。機能主義的な解釈に

(1) 「旧石器時代のリアリズムという考えの基礎になったマグダレニアン期の資料は、象形芸術の実際の始まりが三万年の間に連続しており、象形芸術のごく後期の状態を示している、ということに気付いたのは最近のことである。当面の話題としてとりわけ興味深いのは、図示表現がいわば現実に隷属した、忠実な模写としての表現から始まったのではないということ、それが一万年ほどの時間をへて、まず形を表現した表徴ではなく、リズムを表現した表徴から形作られてくるということである。」¹⁾

(2) ルロワ＝グーランは、紀元前三万五千年頃に始まった図示表現の痕跡を、人間のものに限られる表象を操作する技術の最初の証拠と位置付ける。「音の表象としての思想を、具体的な行動の道具、手段として作り上げる際に、第一に、手と顔の運動機能が関わってくる。旧人の時代の終わりに、表現表象が姿を現したということは、二つの動作極の間に、新しい関係がうち樹てられたことを仮定させる。この関係は、言葉の厳密な意味で、人間だけの特長であり、つまりわれわれが自分で表象

還元されない意図的な図示表現の痕跡は、言語能力の構造的な運用の側面から接近していったときに、非人為性の偶発的な痕跡に対して人為性の輪郭を明確なものにする。このような人為性と非人為性との境界線に比べるならば、いわゆる言語の忠実な表記としての線状的な書き込みが成立した以後の文字と非文字との境界線は極めて不明瞭であると言えるかもしれない(脚注³⁾)。ただ、一般的には言語と人為的な表現とのはっきりとした結合は、文字と非文字という第二の境界線から始まったと考えられており、更に言語運用の合理的な構造記述が、その書き込みの照準を専らその境界線に向けるしかないことには注意すべきであろう。

文字と非文字との境界線は、個別言語の歴史的な限界線を延長する使命を帯びているため、本来自律的でなければならないが、文字はあくまでも言語的な書き込みでしかあり得ない。文字の運用は、あくまでも言語の体系的な運用にできる限り忠実に従うのであり、それ自体で成り立つ独自の構造を持ってはいないとされている。文字の言語的な使用を境にして言語が抽象化された概念に先導されるという考え方と、逆に文字が継起的な論理に支配されるという考え方は一見対立しているように見える。前者の考え方によれば、言語が文字に従属することになるし、後者の考え方によれば文字が言語に従属することになる。しかし、これらにはその境目から言語と文字との密着的な関係が始まるという点で共通の理解がある(脚注⁴⁾)。前者は地理的空間的な境界線に、後者は歴史的時間的な境界線に主に立脚しており、我々はその境界線の向こうに文字と言語が各々独立した純粋な状態があるかのような錯覚に陥る。だがここでの境界線はあくまでも文字と言語との関係が変化したことを示すための、移行過程に想定された抽象的な敷居に過ぎない。両者は元々常に関係していた、あるいは共通の論理に支配されていたと

を用いる度合いに応じて表象になる思想という形に呼応する。この新しい関係の中では、視覚が顔一読みとり、手一書きとりという二つの対を支配するようになる。この関係がもつば人間に限られているというのは、厳密に言えば、道具の例は幾つかの動物で知られており、言語活動は動物界の音声信号をただ嵩上げしただけとも言えるが、ホモ・サピエンスの暁までは、表象を描いたり読みとったりするのに比べられるようなものは何一つ存在しないからである。』²⁾ 表象を操作する技術が人間に特有のものであるならば、その痕跡は人為性の輪郭を判明に浮かび上がらせるはずである。ただし、その技術を多産的な創造性の源泉と見るべきではない。多様性を産み出すのはむしろ非人為性の出来事であり、人為性はその一方向的な消費と見なければならない。だが、この消費が物理的な必然性へと向かわず、奇妙な一本化された決定である点が重要なのだ。表象の技術は人為性の飛躍を意味するが、それは行き先の定まらない離床である。

- (3) 一般的に文字の定義とされるのは言語を直接書き表しているかどうかという事柄であるが、このような文字の定義は未だ厳密であるとも判明であるとも言えない。なぜなら、文字の分析は常に文字が書き表しているものは言語であるという前提に立ってなされるからである。そのため、文字の言語性はあまりにも当然であって否定することが難しいことにさえなっている。文字の非言語的な側面が、文字が言語化された特定の時点で突如として完全に消滅すると考えるのは不自然である。
- (4) ルロワ＝グーランの考え方は前者に相当する³⁾。ルロワ＝グーランはアルファベット文字の線的な表記によって、元々言語的抽象作用の産物だった図示表現が、益々音声言語へ従属するようになったと考えている。即ち文字の言語化である。文化人類学者のジャック・グディの考え方は後者に相当する⁴⁾。グディは、分類体系として主に利用されていた文字の性質によって言語が部分的に取り出されるような脱文脈化が起こるようになったと考えている。即ち言語の文字化である。また、哲学者のジャック・デリダは、ルロワ＝グーランの指摘を受けて、言語は元々文字的な痕跡によって成り立っている、文字と言語は独立した形ではあり得ないことを指摘している⁵⁾。

考えなければ、変化の流れを記述しそれを動機付けることはできない。言語的な機能を遡っても文字と非文字の境界線は明確にならないだけでなく、かえって文字と非文字は共に同じ機能の下にその境界線を消していくことになる。

また、聴覚的音声を土台に据えるかどうかに関わらず、言語が辞項的な同一性ではなく差異性によって成り立つ堅固な体系であるならば、その始まりから辞項的な同一性の様相を呈している文字のような実体は、最終的に二次的で派生的なものにしかなり得ない^(脚注5)。文字がある種の外的な派生物であるなら、それと対応する機能を活動体の内部に想定しなければならない。文字はそこでは単位を確定する機能に特化される。従って文字と言語との関係は、固定性一般のこちら側にある活動体の内部的な従属関係となる。文字は、そこでは活動体として前提されているのであるが、内部的な言語と文字の従属関係は、元々相互依存関係へと姿を変えている。その様な活動体内部の關係に於いて、文字的なものとされる痕跡の惰性的時間的性質は相対的なものでしかなく、しかもその性質に於いて言語と文字は相互に部分と全体の役割を交替し続けることになる。部分と全体の関係は、共通の拡がりを持った活動体の内部で、矛盾のない機能を交叉させながら共通の目的へと統合されていく^(脚注6)。ここでは、文字と非文字の境界線は活動体の内部的な充足によって一見自明なもののように見える。つまり、読めるものとそれ以外のものとがはっきり分かれているように見えるのだ。だが、それは活動体の不分明な拡がり非文字を自動的に排除してくれると見なしに過ぎない。読み取りの充足感の中で語られる言語と文字との間の忠実性の神話は、実際には固定性としての文字と非文字との具体的な境界線とは無関係と見なすべきである。

従って一般に文字と非文字との境界線上に重ね合わされた、言語として機能する文字の歴史的な起源というものは、実際にその境界線を支えている当のものであるとは言えない。境界線は、言語的な読み取りの到達限界という、言語と文字を分離不可能なものとする活動体の遡航的な極限として、常に暫定的に語られるに過ぎない^(脚注7)。そして、非文字の側に入れられる意図的な書き込みの解釈もまた、実際にはそれを言語的な運用能力の射程内に止めた形でなさ

(5) 差異によって成り立つ言語に関しては、言語学者のフェルディナン・ド・ソシュールによって、その構造の組成が考察された。言語は純粋な差異による体系であって、その差異は積極的な辞項を持たない。差異によってのみ成立する体系は、辞項の内部分裂によって侵食されることなく、非常に強力に機能する⁶⁾。

(6) 言語と文字は活動体の内部で共に機能する以上、その両者の関係としてしか捉えられない。従って全体と部分という関係に当てはめた場合にも両者の配分は不確定である。

(7) 言語の表記が始まった時点文字の始まりとするのが一般的な見解であるが、現在では解説可能な一番古い文字とそこに到る前段階を文字の始まりとするしかない。しかし、その境界線は実際には曖昧である。この文字と非文字との境界線の議論は、殆どの場合、今後もまだ考古学的な画期的な発見があるかもしれないといったような留保に辿り着くことが多く、文字とは何かという問題は歴史の中で常に宙づり状態のまま放置されてしまう。また、文字への発展過程を問題にする場合、文字の前段階があたかも言語の表記を目指して前へ進んでいるかの様な目的論的な解釈が横行しているが、この様な解釈は文字の原初の宙づり状態によって許されてしまうことになる。

れる。もしもそうしなければ、非文字の運用と文字の運用とは全く無関係な技術として並列的に進化し続けていることになってしまうだけでなく、非文字の運用が文字の運用を産み出す動機はなくなる。非文字の運用が文字の運用へと進化すると考えるために、文字と非文字を共に言語的な活動の内部に取り込まなければならなかったのである。文字が作られ流用される意図的な過程が現在に於いて具体的に確認でき、更にはその過程を再現できるとしても、それは確かに常に活動体としての言語の内部で起こっている出来事としてしか観察し得ない。従って文字と非文字との境界線は、活動の痕跡から類推された運用上の構造の相対的な違いと言うことしかできず、その違いはそれだけで自立的に境界線を成立させることはない。しかし、活動体に取り込まれた言語的な文字に対して、固定性として置き去られた言語的な書き込みは、本来、絶対的に背を向けていると考えねばならない。その限りに於いて両者は、歴史的あるいは地理的な境界線上で再び完全な形で出会うことは絶対に無いはずである。それ故この文字と非文字との第二の境界線は、それ自体極めて消極的な敷居であると考えなければならぬ。それは、隔絶された関係にある言語的な書き込みと言語的な読み取りとの原理的な齟齬によって永久に彷徨う、遡航的な水際に現れた儚い波線に過ぎない。その波線は、人為性と非人為性との境界線まで迫って来ることもあれば文字に関する技術革新に関して歴史の上に引かれた境界線の各々の上に現れることもある。実際にはその様な境界線は永久に先送りされていると言うこともできる。文字と非文字との境界線は、斯くして極めて不明確なまま、常に人為性と非人為性との境界線の手前で保留されているのである。

2.2 言語的な読み取り

一般に、言語的に読み取り可能だったかどうかは、それが文字であることの判断基準である。ただ、文字と非文字との境界線を、過去の人為的痕跡に対する言語的読み取りの歴史的極限と考えた時に、果たしてその時代から言語的読み取りの証拠が残されているのかという問題が否応なく浮かび上がってくる。記録や保管を目的とした書き込みや、伝達を目的とした様々な装置に関する証拠は確かにある。取引の証文や内容証明や書簡などの、伝達の機能がはっきりしているものは確かに残されている。しかし、純粹に言語的な読み取りは、連続して途切れない時間の中にしか残しようがない。また、その様な時間の中に存続する読み取りが、現在の書き込みに対してすら客観的な証拠となり得るのかというと、実際にはそれも確定的ではない。読み取りそのものが原理的に書き込みとの断絶を含んでおり、どんな読み取りであってもそれが本当に当該の書き込みの読み取りであったのかを確証することはできない。書かれたものが必ず読まれる保証はない。このような不確定度は、時間を遡るほどに高まるのであり、例えば紀元前千年よりも前の古代文明に属する様々な文書が実際には全く読まれていなかったと

いう想定も、作業仮説としてだけでなく手続き上不可欠である。書き込まれた通りに読み取ろうとするならば、全ての既存の読み取りは一旦排除されなければならない^(脚注8)。常に文書は読まれていたか否かに関わらず書き込まれていたのである。言語的な読み取りの歴史的極限という考え方は、そのため原理的に不可能である。言語的に読むことができるように書かれたという想定を文字と非文字の境界線とすることはできない。現在までに様々な消失言語の解説が残された文字を元にして成功しているが、再現された読み取りはあくまでも現在の読み取りであって、当時そのままの読み取りの存続ではない。読み取りそのものの優位性、更には読み取りという過程そのものは、その時間軸上の距離によって原理的に消失していると考えが必要がある。

読み取りの文化は、ある意味では、文書の複写や編纂や解釈の歴史の中にあると言えるかもしれない。例えば、古代メソポタミアでは、粘土板による様々な写本が作成された証拠となる現物が残っている。古代ギリシャからは、パピルスによる写本、古典や聖典の編纂と解釈などが、現物は残ってはいないが、様々な歴史的紆余曲折を経て今日まで文書の集蔵体を存続させている^(脚注9)。写本あるいは複写は過去の文書の大半を占めている。確かに完全に読み取りを排除した書き込みはあり得ないということが言えるかもしれない。実際に古代の文書には、読み取りに関する記述が多数含まれている。しかし、その様な読み取りはあくまでも書き込みの同質的あるいは同類的増殖から遡って想定された読み取りである^(脚注10)。あくまでも過去の読み取りは言語的な虚構であり、その虚構の度合いは歴史上の過去に於いては一般に考えられているよりも大きく、言語的読み取りから厳密に区別された言語的書き込みという作業仮説的な虚構との違いは相対的なものでしかない。現在に於いて、その文書が生きているか死んでいるかという議論に於いては、その両者の並行関係を考慮しなければならないのであるが、さし当

(8) たとえ文書の同時代に様々な読解に基いた解釈が行われている証拠があろうとも、その解釈は現在に於いて読解の手本とならないのは言うまでもない。むしろ読解を経由した文書の改竄から原文書を復元することが必要な場合すらある。過去の文書は常に読み取りから切り離して新たに読み取られなければならないのである。

(9) 古代メソポタミアの粘土板文書は、当時書かれた現物に対して現在の読み取りが行われる。それに対して、古代ギリシャの著作は、現物ではなく、その後の各時代毎に受け継がれた転写の繰り返しから残されたものに対して現在の読み取りが行われる。後者の文書には特定の著者があることが多く、原典の復元という問題も生ずる。ただ、このことは現物が失われるからこそ文書には理念的な中心が要請されるとも解釈できる。粘土板のように、好条件の下で耐久性のある文書には、写本に際して文字が中心となり、著者などの形象は要請されなかった。記憶に頼らなければ文書を維持できないという慣習的な事情が、著者という形象を産んだという仮説を立てることが可能である。つまり、著者、原典、記憶、読み取りの優位などの歴史的象は、文書の耐久性の欠如による文字の退化と見なすこともできる。

(10) 写本があるということは元の文書の文字が読み取られたということの意味する。また、解釈があるということは元の文書の意味が読み取られたということの意味する。しかし、これらはあくまでも文書が増殖する仕方の分類からの類推に過ぎない。写本による同質的増殖も、解釈による同類的増殖も、共に読み取りと切り離された書き込みであることに変わりはない。

たって書き込みと読み取りが現在同時進行中の案件に関しては、文書が死んでいる状態を考えなくても済んでいる。だが、遠く過去に遡った文書に関しては、幾ら明解に解読され現在に於いて完全に生きている文書であっても、その過去の書き込みの時代の読み取りは完全に消えているのであり、文書はその死んでいる状態を主要な状態と考えねばならない。

書き込みと読み取りとの関係に関して今日の我々は全く重なり合った状態を想定している。文書の著者は、署名によって書き込みの場を明示するのを習慣としており、読者はある特定の著者を想定した上でしか文書を読むことはない。著者は言語を通して読者と意志疎通可能な共通の場を持っているという前提がそこには存在する。しかし、そのような言語的な書き込みと言語的な読み取りとの約束された一致は、制度的約定的な一致に過ぎない。書くことと読むことの間には、今日では非常に厳重な慣習の規則が構築されており、その規則の学習を前提にして両者の一致が成立しているのである。一般的に正書法と呼ばれる書記法上の規則はその基礎的な部分をなしている。このような慣習は、同時代の文書に対してだけではなく、過去のあらゆる文書に対しても同じような態度を生じさせる。即ち、全ての文書は正しく解読されるべきものであり、正しい解読が可能になった後には最早正しくない読み取りは無価値であり、正しい解読はその文書の同時代に於いて為された読み取りの正確な再現であるという態度である。このような態度が当たり前のこととなったのは、古代の文書の解読が著しく進歩した過去二世紀以来のことである。

勿論、十八世紀以前に行われた読み取りが正しい解読を目的としていなかったわけではない。古代エジプトの聖刻文字に関するウィリアム・ウォーバートンやゲオルグ・ゾエガによる解釈は可能な限りでの妥当な解読への接近の試みとみなせる。ウォーバートンは、聖刻文字と表音文字との相互関係に関する理論を提示し、ゾエガは聖刻文字が表音文字として使用された可能性について論じている⁷⁾⁸⁾。ヘンリー・ローリンソン、ジャン・フランソワ・ジャンポリオン、ペドジッヒ・フロズニー、マイケル・ヴェントリスなどによって、主要な古代文字の正しい解読は始まったのであるが、重要なのは彼らの個人的な業績によって開始された文書解読作業が、その後、組織的かつ集団的に進行していく時に共有される解読の思想である。正しい解読が一旦方法として確立された以上、それは個人の学説に属するのではなく、共通の理解の下になされる協同的な作業となる。確かに解読はその後もうすんなりと進むわけではなく、遅々として捗らない地道な作業と新しい発見が繰り返される事に変わりはない。しかし、そこには正しい解読の始まりにより解読の正しさに関する共通の基準が確立されたのであり、そのような観点から見たときには、解読方法の発見即ち古代の文字言語に関する共有された文法の確立以前の、未だ成功していない様々な個別的学説は、異なった思想の下での異なった時代の産物となる。

今日に於ける古代文書の解読は、解読可能な範囲の厳密さに関しても全く妥当なもので疑うべきところは何一つ無いが、十八世紀以前の読み取りが単なる解読の歴史の中での個々の物語、あるいは解読の方法論が必然的に辿る進行過程およびその脇道の例証以上の価値を持たないと見る捉え方の有効性は、研究対象を特定の目的によって絞り込んだときに前提となる思想の射程内に限られる。その思想は、とりあえず読み取りを言語的な復元に限定し、方法論的な読み取りの階層を厳密に定義した上で、共有可能な内容だけを取り出すということに尽きる。そこでは最も重要なのは、ある特定の言語から別の特定の言語への翻訳である。意味という不明瞭な解釈は、言語学者ロマン・ヤコブソンが定義した様に、そこでは翻訳という言葉に置き換えられる^(脚注11)。初めから意味が多産的であることは許されない。多産的な読み取りは、それが文書と同時代のものであってもその時代の虚構的物語としてその内容が翻訳されるだけである。文書それ自体はそれらの翻訳を媒介として現在に移管され、また未だ読まれていない文書が大半を占める集蔵体の全体として保留され、場合によっては多産的な読み取りの例証として保留され、文書は固定性を確保することになる。このような現在に於ける過去の文書の固定性は、読み取りそのものの保留に他ならない。即ち、解読とは結局のところ読み取りではなく読み取りの保留であり、いかなる文書も原理的に読み取られたことはなく、文字は完全に読み取り可能なものとして成立したことはないことになる。

古代エジプトの文書に対する多産的な読み取りの極端な例として、十七世紀のイエズス会司祭アタナシウス・キルヒャーによるものが挙げられる。王の名を表す文字の囲いであるカルトゥーシュの中には、通常、聖刻文字が表音文字として使われていたことは、後にジャンポリオンの解読によって確認されている。プサメティコス王の名前を表す聖刻文字を、キルヒャーは、次のように読んだ。「オシリスをティフォンの暴力から守ることは、敵ティフォンの暴力に対して、ナイル川によって慣習的に与えられる繁栄を楽しむことを保証するために、いけにえと、三重世界の守護神に懇願することによる、正しい儀式と礼法によって行われなければならない。」⁽¹⁰⁾このような読み取りは、現在では全く無価値なものとされている。キルヒャーによる寓意的な解釈は、多分に突飛な想像を含んでおり、創作的な読み取りの極端な事例である。しかし、正しい解読が立脚しているのは、言語的な書き込みに於ける因果性のみであり、実際の同時代的な読み取りは、言語的な書き込みから現在よりも遥かに隔たっていたかもしれない。古代エジプトの絵画的な聖刻文字は、当時の文字の読めない者にとって、キルヒャーのような寓

(11) 「言語学者としても、また、普通の語の使用者としても、我々にとって、全ての言語記号の意味とは、その記号と置き換えられ得るもっと別の、交替的な記号への翻訳であり、特に、記号の本質の最も深い研究者パースが力を込めて言明したように、元の記号がより詳細に展開される記号への翻訳に他ならない。」⁽⁹⁾

意的な読み取りを許容するものであると考えた方が自然である。従って正しい解説は読み取りの正確な再現ではあり得ない。

古代メソポタミアでは、文字の使用が元々表音的ではない文字から始まったこと、シュメール語とアッカド語の二言語併用状態が文字の表音的用法を多重化したこと、などの事情により文字の用法は非常に複雑なものとなっている。丁度、日本に於ける漢字と仮名の使用と近い状況であるが、音節が少なく確定的な日本語とは異なり、逐語的な音節の読み取りに限定されない特殊な文字の読み取りが可能だった^(脚注12)。そこでは一つの文字が複数の音と意味を担うだけでなく、音節の区切りを異なったやり方で分解することにより、物や人の名前が様々な意味を持つことになる。一つの文字がシュメール語による複数の音とアッカド語による複数の音の間で読み替えられるだけではなく、音節の区切り方の違いが別の文字に当てはめられ更に複数の音や意味を招来するのである^(脚注13)。このような文字の用法によって、例えば固有名詞は幾通りもの綴りが可能であったし、この綴りの不整合はむしろ意味の豊穡さそのものであった。文字に対する言語的な読み取りの過剰性が、未来の出来事の予兆を様々な事柄の中から読み取るやり方と通底していたことも、占いの説明書として分類される多数の粘土板文書から知られている。書き込みも読み取りも過剰性を持ってしまうような状況は、文字の特殊な使用によって起こったのだろうか。書き込みが読み取りと同様に過剰性を呈していたということになれば、書き込みに忠実な、文字通りの読み取りは当てにならない。斯くして読み取りの目標は多様な書き込みの背後に想定された一つの原書き込みへと向けられる。だが、もしもこの書き込み以前の原書き込みを読み取りと書き込みとの一致とするならば、文字に纏わる全ての過程は文字にとって虚構的なものになってしまう。

言語音声上の名前、名前を表記した文字、その音声的読み、文字の多義的な意味、名前の言語音声上の意味、文字の異なった読み、その読みの異なった分節を表記する文字、等々幾らでも増殖可能な状況は、書き込みと読み取りが切り離された場面では自然なことであるが、この読み取りが当該の書き込みとの間で過剰性を共有すると見なすならば、読み取りと文字との間だけでなく、書き込みと文字との間にも大きな亀裂が生ずる。正しい解説あるいは翻訳は、読み取り一般から言語的書き込みを仮想的に切り離してくれるが、言語的書き込みはそれ自体活

(12) 日本語の音節は実際にはそれほど確定的とは言えない。ただ、仮名文字と漢字の使用によって音節の認識がかなり限定されているため、異なった音節を切り取る可能性は表記上はあり得ないことになる。

(13) 「文人は、文字の観点ではなく、彼独自の現実の観点から全く異なった見方で分析しようとしていたのだから、分綴法の規則に縛られることはなかった。彼にとって重要であったのは、この名前について、音声的視点から見て実際のもしくは潜在的に引き出しうる内容であった。この名前のそれぞれの音節は、楔形文字の音価の元来の起源であったシュメール語の単語を表している。そして更に、その先に存在する事実をも表している。」¹¹⁾

動体の過去の出来事を現在に於いて復元しようとして産み出された虚構であることに変わりはない。ただ、文字そのものの過剰性は、読み取りの過剰性やそれと一致する書き込みの過剰性とは無関係であるが、書き込みがなければ文字は出現しようが無いのだから、それは言語的書き込みから来る過剰性に由来すると考えなければならない。ただ、その言語的書き込みから来る過剰性は一方的なものであるため言語の合理的分析に忠実ではない。

2.3 言語的な書き込み

言語的読み取りが正しいかどうかを判定するためには、言語的書き込みの守備範囲を限定する必要があった。過剰な言語的読み取りに関しては、歴史的な例証として、あるいは文学的な創造の継起として、各々に囲い込まれた領域が用意された^(脚注14)。だがあくまでも過去の書き込みの動機は言語的に限定されていなければならなかった。過剰な読み取りと同じ様な文脈で、過去の書き込みを解釈するわけにはいかない。例えばものとその名前とが同一視されていたからといって、名前の書き込みを言語的な書き込みと別な動機に結び付けるわけにはいかないのは当然である^(脚注15)。そのため、過去の書き込みは言語の忠実な置き換えとして成立したということが前提となる。書き込みの背景には必ず一つの言語的な発話が随伴しており、その正確な復元だけが読み取りの正しさを判定する基準となる。しかし、復元の目標となる一つの発話は永久に失われてしまったはずなのになぜそれがあることを前提にできるのだろうか。理解可能な発話の連続性は、現在の言語の正常な発話とその聞き取りを元に想定された理念的な図式の中への置き換えという形をとることによってしか成り立たない。言語的書き込みと言語的読み取りとの関係は、そこでは積極的な辞項を持たない言語の消極性によって密着した隙間のない関係となる。言語的書き込みと言語的読み取りは切り離すことのできない全く同じものなのだから、それらが一致することが言語的読み取りの正しさだということになる。だが、少なくとも過去の書き込みと現在の読み取りとの間にある時間の隔たりは決定的であり、また、過去に於いては読み取りのない書き込みの状態が少なくとも何百年も続くのは当たり前のことだったはずである。同時代の大量の文書を無時間的に処理することに慣れている我々が、必ず遠

(14) 文書の解釈として書かれたものは、それが過剰な読み取りであっても、書き込みとしての領域を与えられる。ただ、それは共有可能な読み取りとは見なされない。その様な書き込みは、正しい読み取りではなく、創造的読み取りに基いた書き込みということになる。

(15) 名前とその名指されたものとを同一視するという思考の仕方はそれ程珍しいものではない。むしろそれらを全く無関係だと言い切るの方が難しい。實在論と唯名論との論争は至る所で見いだせるが、名目と観念を分離することの難しさはその配分の決定にある。名目が音声言語のように常に消えてくれる場合には唯名論をとりやすいが、固定性の強度の前では思考を固定性の配分に任せる他はない。言語と切り離された思考の想定は意味がないということによく指摘されている。それと同じように文字と切り離された思考の想定も意味がない。従って文字の實在論が特別なものとして説明されている場合は、そこに自民族中心主義を疑ってみる必要がある⁽¹²⁾。

い過去のものに属していた文書の扱い方の真相について簡単に判断することはできない。言語的な書き込みは、言語的な読み取りに対してなされるのではなく、まずは時間の隔たりや取り戻せない媒介物に対してなされていると考える必要がある。

言語的読み取りと言語的書き込みが密着していた状態を想定するならば、その間に挟まれる固定性としての文字は問題にならないだろうが、両者が原理的に引き離されている状態を想定するならば、それは大きな領域を占めることになる。書き込みと読み取りには、その順序として時間的な隔たりが介在しているとする事もできる。この場合は順序は不可逆的であり、両者は元々隔たっているのだから再会することはあり得ない。また手続き上の媒介を通して両者が隔たっているとするならば、両者はその媒介を消去することに於いてのみ出会うことになる。媒介を消去できるものとするか否かは、文字にとって大して重要ではない。むしろ重要なのは両者を一致させようとする努力が、読み取りを書き込みへと一方的に向かわせようとする事である。書き込みを優先させることが言語的な忠実さになるのはなぜか。書き込みが時間的に先行しているとか、変更不可能だからということは理由にならない。時間的な先行性や変更不可能性は、非言語的な固定性の問題であり、言語の問題ではない^(脚注16)。言語は、ここでは専ら書き込みの側にあると見なされている。そして書き込みがいかなる状況と手続きによって為されているのかということが言語的読み取りを限定し、その正確さを検証する。言語的読み取りは、このようにして言語的書き込みに従属する。言語的書き込みは回収の無い譲渡へと向かっており、循環的に意味を修復していく読み取りの過程のような自由度を持たない。従って言語的読み取りは、言語的書き込みに従うことによって縮減され、最終的にその中へ含まれる。言語はこのような書き込みへの読み取りの折り返しを通して、発散から集約へと向かう。

言語的読み取りを含んだ言語的書き込みは、声に出して朗読する場面を想定する。あるいは書き込みは常に口述筆記であるという想定である。書き込みは、書き込まれる前からその通りに用意されているということになる。確かに、かつての書記の役割が主に口述筆記と朗読だったということは良く知られている。ただ、言語的書き込みは必ずしも筆記の場面に限定されるものではない。言語的連続性の構築、即ち発話行為の継続そのものが言語的書き込みを構成する。ここでは当然意味の構築よりも連続性が優先される。意味は途切れたり元に戻ったりしながら構築されるが、それは読み取りの過程に関わっている。読み取りの過程を正確に復元するなどということは無意味である。連続性は意味によって構築されるのではないからだ。書き込みとは意味を犠牲にしてまで無条件の連続性を継続する過程である。このことが言語的な復元

(16) 循環的で自己修正的な言語は、先行性に左右されないし、書き込みが固定性へ引き渡されるまでは元々変更可能だったからだ。

を始めて意味のあるものにする。文字の効用として、しばしば全体を視野に入れたり元に戻ったり反復したりできるということが挙げられるが、これはあくまでも言語的読み取りの問題であり、更には口頭言語の認識過程を文字の平面的配置から読み取っているに過ぎない。言語的読み取りは文字があっても最終的に文字とは無関係に行われる。

言語的書き込みは、最終的にその過程を線状性へと集約する。しかし、あくまでも言語的書き込みは、既にある線状性に忠実に沿って復元された言語的な虚構である。確かに虚構的に再構築された書き込みが連続性を持ち、中断、反復、循環等を排除していることが、逸脱の無い言語的正確さの拠り所となっている。線状に朗読できるということは、まずは言語的書き込みを復元する第一歩である。そして、朗読できる線状性が構築の過程を逐語的に復元する道筋と見なされる。だが、構築の過程へ一歩でも踏み出すと、既に線状性から外れた読み取りと同様な虚構の世界に入ってしまう。そのため結局の所、書き込みは構築の過程を含むことはできない。このようにして得られた言語的書き込みの過程は、より現実的に見える意味の生産性の過程ではなく、極めて便宜的に見える単純化あるいは画一化の最終過程である。多義性を一点に集約することというよりも、これは多義性の端的な消去あるいは意味一般の消去である。言語的書き込みは、このようにして理想化された口述筆記の場面に局限されてしまう。言語があらかじめ完全な形で連続性を持った書き込みを用意し、それをそのまま文字に置き換えるということである。このような口述筆記が実際には不可能であることは言うまでもない。あらかじめ用意されたものは、そこでは音声言語ではなく、既に関き込まれた当のものだからだ。ここでは、言語的書き込みは、線状性を具体的な形として対応させることすらあり得ない。というのは、ここでの線状性は発話の連続性でしかないだけでなく、その連続性は非連続性の否定という意味しか持たないからだ。つまり、言語的発話は常に継続中で中断されてはいないということだけが言語的書き込みに関わっている連続性である^(脚注17)。従って文字の線状性がそこから残されたものであるとしても、それは実際には言語的書き込みの継起的連続性と重なるものであると端的に言うことはできない。

言語的な書き込みの合理性は、従って言語分析の合理性の内部にその進むべき先が理念的に確保されている様な分かりやすいものではない。言語的な書き込みは、便宜的な辻褄合わせや成行き上の不整合が全てを支配している不可逆的な決定へと到るのであり、再帰的な回路がその進行を常に統御しているような言語的な読み取りとは厳密に区別しなければならない。言語的な書き込みをそれとは本来無関係な言語的読み取りによって判定し、その進化を後付けると

(17) 言語的発話の連続性は後で再確認するが空間的位置の相対的同一性に依存する。その上に成立するのが特定の音響の連続性である。ただ、ここではいずれにせよ連続性は、発話がある時点で文字と接点を持ちながらまだ終了していないという微視的な継続性に局限される。

いったやり方は、手順を逆転したやり方である。このような書き込みの決定は、逆に言語的な合理性を裏打ちすることになってしまい、それが図らずも土台となって書き込みの痕跡を活動体の出来事と見なす根拠が生じて来るのである。言語的な書き込みから残されたものをそれ自体で考察するためには、言語的な機能を前提するのではなく、その固定性の内部での形態を静かに観察する必要がある。文字と非文字との境界線と同一視された、言語に対する文字の忠実性は、人為性と非人為性との境界線が判明な痕跡として固定性の上に描かれているのと同じ様に、線状性という際立った輪郭を浮かび上がらせている様に見える。しかし、線状性を巡って書き込みと読み取りが一致しているという見方は単純すぎる。書き込みと読み取りの一致はかえって線状性を破壊することになる。線状性はむしろ書き込みと読み取りの分かれ目と考えた方がよい。

2.4 書き込みの画一化

文字の成立は、一般に歴史上全く同じ様に何度でも再現可能な行程であるとみなされ、文字の言語運用上の原理的な不整合は、活動体の多様性を生む機構へと統合される^(脚注18)。しかし、このような具体的な幅を持った活動体の内部へと組み込まれたはずの、ずれによって多様性を生み出すであろう文字の分散は、実際には、言語の多様性とは全く相反して、完全に画一的なものであった。その典型的な事例は、ラテン文字による表記である。文字を統一しようとする画一化の欲求は明らかに過剰であり、根拠が無く破壊的ですからあるが、確かにある程度は成功してしまっているのだ^(脚注19)。文字をある種の生産性であると考えたとこの事態は理解不可能である。文字は、惰性的な書き込みによる不整合の集積であるにもかかわらず分散化することはあまりなかったのであり、相互に排斥しあいながら多様な拡がりへと向かうよりは陳腐な画一性を手放さないことが多い。初期値の僅かな相違が多様な変化を生み出すのではなく、多様な変化がたった一本の線を上下に揺すりあっているのだ。初期値の僅かな相違が無効にな

(18) 文字は言語から言語へと流用されるのが普通である。言語も地理的な隣接関係、移住、植民などによって移動するのであるが、言語は常に体系としての自律性をその場毎に成立させる。文字は言語へ対応させるために意図的に変更されるが、それ自体で体系としての自律性を成立させることはなく、どちらかというと保守的である。言語とのずれが文字の独自の生産性に結び付くことはなく、言語との不整合は文字の積極的な体系性を意味しない。意図的な流用や変更が確認できる以上、文字は全く独自に新しく作ることができるというのが常識的な考え方である。文字を言語と同じ様な体系による活動体と見なすならば、文字の成立は再現可能であることになるが、文字に関しては積極的な意図の介入があったとしても、言語のような活動体の自律的な生命とその繰り返される成長過程を思い描くことは決してできない。文字は言語とは裏腹に全く死んだ固定性であり、活動体の活動から残された残骸の全てを代表している。そして、我々はそのような残骸の中に人為性を再発見しながら、活動の全体をその固定性に委譲し続けているのである。

(19) ラテン文字の使用人口は現在地球上の約30%になる。キリル文字とアラビア文字は各々約10%である。ラテン文字は文字の符号化による機械処理の先行性に関して飛躍的な優位を占めており、この画一化の状況には注意する必要がある。

ると言うよりも元々それは無関係なものですらある。文字による伝達機能の実現には画一化が不可欠だったという解釈は成り立たない。伝達機能は地理的範囲を不必要に広げず、むしろ時間的空間的距離が常に複雑な変化と分岐を産むからである。言語は体系として相互に対立し合い、地域的にも或いは同一の話者に於いても複数性を必然的に維持するが、文字は体系ではないことが規則に縛られない自由な創造を招来するのではなく、却って伝達の範囲を逸脱した共通性をもたらす。言語的書き込みが差異性ではなく同一性によって為されるという事だけではこれは説明できないし、体系性によって説明することはなおさらできない。書き込みの画一化は、例えばラテン文字を一つの有利な体系と見なす場合の様な文字体系の統一という事態とも言い切れないし、また同一性で成り立つ慣習の惰性的な拡がりという事態とも言い切れない。

文字の画一性の理由を問う必要は実際には無いのかもしれない。なぜなら、固定性とは変化の停止である以上、多様性を生む理由はあり得ないからである。人為性と非人為性の境界線は、すなわち固定性と活動体との境界線である。人為性は人間の活動によって定義付けられるのではない。活動体はむしろ非人為性の側にある。人為性は固定性として定義されなければならない。それは変化や差異の生産活動ではなく消費の残骸である。その消費は、活動体の自己同一性を維持するための循環的な消費ではなく、二度と回収されることのない固定性への完全なる消費である。このような固定性の相の下に文字の画一性を置くならば、文字が過剰な単純化を指向することと、線的な集約の形態をとることが同じ事態であることになる。しかもそれは段階的な移行であってはならず、端的な出現であるかのように消費されていなくてはならない。画一化は明らかに自然の非人為的な漸進的反復の行程に反する。人間の図示表現が抽象表現から始まるというルロワ＝グーランの見解は、現実認識の単純化と同時に記号化をも想定したものであるが、そこに固定化という事態を付け加えたときに、図示表現は人為性を決定する人間的消費の端的な出現であることがわかる。その出現以来、人為性は変化することなく現在に残されていると考えねばならない。痕跡の現実的な変化、即ち破壊や風化等の現象は、現在から遡った過去の非人為性に関する確定的な再現の中にしか存在しない。人為性の現在に於いてそれは常に虚構である。人為性は非人為的な変化によって一方的に奪われるかもしれないが、人為性へと飛躍する人間的消費は、虚構的な過去の変化の延長にではなく、未来の固定性にのみ向かっている。そのため、過剰な固定性への意図的な委譲が人為性を規定しているのである。人為性とはこのような固定性への関わりであり、そのために人為性は変化の否定即ち多様性の否定を、そして単純化を指向する。線状性とはこの単純化の必然的な形態であるだろう。

文字の出現を線状性によって特徴付けるならば、それは逆に人為性の本質的な形態を過去の歴史の中で際立たせることになる。現在残された具体的なもののの中に過去の人為性を探ろうと

するならば、線状性の背後に具体的に確かめることのできない言語一般を想定するよりも、線状性という具体的な形態に目を凝らす方が先である。書き込みと読み取りが一旦分離された以上、線状性は言語によって根拠付けることはできない。逆に言語の線状性と言われるものと文字の線状性と言われるものとの一致ではなく、亀裂の部分に注目する必要がある。その亀裂にこそ人為性の仕組みが隠されているかもしれないからだ。その亀裂は、文字の出現を言語の体系性による構造的飛躍と同等のものではなく、また不可逆的進歩であるとか再現不能な一回的発明でもないものにするだろう。文字は、現在に於いて人為性一般が呈する独自の形態として、言語的書き込みや言語的読み取りとは別に正当化されなければならないのである。文字は何らかのためのものであってはならない人為性を代表する必要がある。つまり文字はそれ自体独自の技術であってではない。文字は、さし当たって我々の目を線状に反らし続ける。線状性は実際に様々な機能を持った形態である。この現在に於ける機能の多数性は、まだ人為性の暫定的な状態に過ぎないかもしれない。しかし、その更に本質的な状態を先取りする必要はない。目を反らし先延ばしするといった機能ですら確認するのはこれからである。

3. 言語の線状性

3.1 音声言語の複合性

線状性は、通常、音声言語の時間性によって根拠付けられる。そこでは音声の時間軸上の継起性と文字配列の平面上での継起性とが同一視される。この見解を端的に否定するのは難しい。確かに口述筆記や朗読の場面を想定すれば、音声言語と文字言語が線状性を共有し、しかもそれが元々音声言語の音響線によって主に導かれていた様に見える。だが、この見解は言語的な線状性と文字的な線状性を細かく検討した上での結論とは言えない。言語的な線状性には、実際には音の変化を一本の線で横に描いた様な想像しやすい時間線は当てはまらない。時間の流れを一本の線に置き換えるという連想は、多分に経験的な了解でしかない。一本の線の様な時間は文字の使用によって得られた時間認識であるという見方も可能で、そうすると逆に文字配列の無限に続く延長という印象が、時間の流れについての認識を決定しているということになる。言語分析に於いては、とりあえず線の延長を前提しないことが暗黙の了解事項であるように見える。あるいは、言語にとって線的な時間は外から与えられた媒質に過ぎず、言語体系に直接関与しているものではないという考え方もできるだろう^(脚注20)。いずれにせよ、く

(20) 時間性を言語に外から与えられるものとするならば、時間性は言語に対して特に関係が深いということにはならない。時間性によって言語を規定し、更に言語の時間性によって文字の線状性を根拠付けるならば、直接文字に対して時間性を適用した方がよい。しかし、このような時間性の万能に

っきりとした長い一本の線は、言語からは直接得られそうにない。だからといって、言語は全く線状ではないという事にはならない。言語は、巨視的な線、即ち線の延長には関わらないが、微視的な線、即ち量子的かつ断片的な線には関わっている(脚注21)。それが、そのまま日常的な時間認識に延長できないというだけのことである。

言語に関わる音声の客観的な取り扱い方には二通りのやり方があり、物理的な音を扱う音声学と、言語的な音を扱う音韻論とに分かれる。これらの二つの分野は取り扱う対象の違いによって区別されるが、片方だけで完全な言語記述にはならないので、相互協力的な関係にあり、決して対立関係にある見解というわけではない。音声学は言語音に関する自然科学的な分析を行うため、対象は発声や聴取に関わる言語の物理的な音であるが、音韻論は物質的な対象ではないものを扱うため、その対象の定義だけでなく、その根拠付けに関しても様々な困難を伴う。音声学では音の記録の仕方、発声器官や聴取器官の分析が専ら問題となり、音韻論では、言語音が言語として機能する活動の本質的な構造が問題とされる。音韻論では、言語音の要素が有限な数の基本的な単位として取り出される。言語学者ロマン・ヤコブソンは次のように音韻論とそこで扱われる対象を定義する。

「音韻論は言語音を扱う言語学の一部であり、言語音が所与の言語で果たす機能に注目する。それに対して音声学は、言語音を純粹に生理的・物理的・心理＝音響的観点から研究することをその課題とする。」¹³⁾「音の差異が持つ言語的機能の根本は意味の区別である。所与の言語で意味を区別するのに用いられ得る音の差異は音韻対立と見なされる。所与の言語に固有の音韻対立の総目録がその言語の音韻体系を成す。普遍的妥当性を持つ一定の構造的法則が、どの音韻体系の構成の根底にもあって体系の多様性を制限しており、その結果、世界中の言語の音韻論的類型論が完全に可能になる。」¹⁴⁾「音声学は、生のままの音の質料について細大洩らさぬ情報を、生理的、物理的特質に関して集めようとするが、音素論或いは音韻論は、一般的に、音声学によって得られた質料の析出と分類に、厳密に言語学的な基準を当てはめるために介在するのである。」¹⁵⁾

言語音の物理的な側面は専ら連続的なものと見なされるが、言語音の言語的機能はその差異によって果たされる。音韻論とは、言語内で使用される音の対立を、言語内で機能する基本単位として抽出することを目的とする。つまり、音の普遍的連続性から、言語的に機能する個別的差異を取り出し、言語の基本的な要素を非連続的な対立として規定するということになる。

期待するのは安易なやり方である。時間性はむしろ個々の継起性や因果性等の明確な線に対して否定的な要因の一般的形象と考える必要がある。時間性はそれ自体で直接活動的であると解釈すべきではない。

(21) 線は全体的な延長ではなく個別的な短い線の断片から確認しなければならない。言語に直接関わっているのはそのような微視的な線だけである。

このように二つの分野に応じて言語音の二つの対象を分けて考える事によって、音の時間的線状性という図式もまた二つに分かれる。物理的現象としての具体的な音は複合的かつ連続的であり惰性的音塊を成しているが、一つの言語共同体で相互理解の目的で使われている音的記号は弁別的かつ連鎖的であり体系的な言語機能体である。これらは両者共に線状的ではある。しかし、一方は連続的だが幅を持っており、もう一方は集約的だが長さを持っていない。

言語音の取り扱いを二つのやり方に分けるという考え方を、それに対する批判から擁護しようとした言語学者ニコライ・トゥルベツコイは、音声学と音韻論に対して、発話行為と言語構成体という対象を割り当てて両分野の違いを明確化しようとした。音声学と音韻論との基本的な区別に関しては、ヤコブソンとトゥルベツコイは共にポーランドの言語学者ボドワソ・ド・クルトネの影響を認めるが、トゥルベツコイが説明に使った二つの対象は、フェルディナン・ド・ソシュールによる発話と言語の区別を援用したものである。そのため、言語構成体という対象は、ソシュールに於ける言語に相当する、どちらかという抽象的な価値の体系として説明されることになる。音韻論が研究対象とする、対立とその関係からなる価値という単位は、最終的に聴覚によっては知覚できない全く非素材的なものである。しかし、抽象的な点としての単位とその関係による連鎖としての音声的線状性が、この定義により純粋な姿で導き出せるわけではない。なぜなら、言語構成体は、発話行為とは異なり、あくまでも有限の数の対立が全体として構成する体系であり、無時間的な閉じた円環だからである。音声的な素材から離れてしまった純粋な線としての言語は最早線であることができない。

「具体的な発話行為で生ずる音声の流れは、相互に入り混じって動いていく音声の運動の、一見無秩序な間断のない連続である。これに対し、言語構成体の能記の諸単位は秩序だった体系を成す。そして、発話行為に於いて具体化された音声の流れの個々の要素や構成因がこの体系の個々の項と関係付けられ得るということによって、音声の流れの中に秩序がもたらされるのである。」¹⁶⁾「音声学の研究対象である言語音は、多数の聴覚的、聴音的特徴を持っており、これらは全て音声学者にとって重要なものであるが、それは、これら全ての特徴を考慮して始めて、問題の音の発音に関する問いに正確に答えられるからである。しかし、これらの特徴の大部分は音韻論学者にとって全く意味を持たない。なぜなら、それらは単語の弁別の目印としては機能しないからである。だから、音声学者の扱う音声は音韻論学者の扱う単位とは一致しない。音韻論学者は、言語構成体に於いて一定の機能を果たすものだけを音声に於いて注目すればよいのである。」¹⁷⁾「高度な音韻論的記述の段階、つまり体系論と結合論とは、音声学から全く独立しているのである。」¹⁸⁾「互いに配慮し合うことが許されるのは、音韻論的記述および音声学的記述の基礎部門だけであって、その場合にもその配慮は絶対に必要不可欠なことだけに限らなければならないのである。」¹⁹⁾

トゥルベツコイの説明は、実際には彼の音韻論研究に完全に適合するわけではない。対立機能の弁別単位を、言語音の物理的素材についての分析と完全に切り離して規定することは不可能であり、實際上、音声学的概念の中から言語に於いて意味を区別している音対立を見つけることになる。だが、この対立の抽出が徹底されたとしても、音声学的概念から音韻論が自律するとは限らない。ヤコブソンは、音声学と音韻論とを過度に分離させようとする傾向に対して警告を発している。言語に於ける弁別機能の単位を成す音素は、あくまでも明確な二項対立のみによって成り立っており、心的な実体性に置き換えることのできない具体的な言語音声の内的な単位である。例えば、音素を具体的な音から切り離してしまう外的な捉え方の一つがヤコブソンによって次のようにまとめられている。

「そこでは、音素は想像ないしは意図された音であり、生理音声的事実としての発音された音に心理音声的現象として対立する。そこでは、音素は外化された音の心的な対等物である。音素の統一性は、その実現の多様性と比較して、同じ発音を目指す内的な起動力と、実現に於ける無意図な動揺との間の食い違いと見なされる。」⁽²⁰⁾

言語音の発声に於ける心的あるいは内的な起動力へ音素を集約してしまうと、音声内の様々な差異の内でも音素の対立を規定する最小限の弁別特性だけが問題となり、それ以外の余剰的特性などは無視される。しかし、実際の発話の中では必ずしも余剰的特性が機能していないわけではない。必要に応じて伝達の信頼性を高めるといふ余剰性の機能は情報としての最も基本的な機能の一つである。音素の対立を非物質的な体系に属する仮構に止まらせるのではなく、物質的な音声の中で具体的なものとして規定することをヤコブソンは徹底させようとする^(脚注22)。そして、音が発音される仕方を観察した調音的側面と、音が聴取される仕方を観察した聴覚的側面との、二つの音声学的な素材のどちらかへ音素を帰着させる従来からの音声学的手法にもヤコブソンは反対する。言語に於ける機能の本質である対立を、客観的な音声そのものに一元的に集約させるために、ヤコブソンは、その究極の関与的な対立の単位として、例外のない二項対立、即ち弁別特性の一覧表を作成する^(脚注23)。音素は、発話の特定の位置に限定できる基

(22) 「余剰性の補助的役割とは、余剰特性と共に起るか或いは連鎖の中で隣接する弁別特性の同一性に関して補足的な情報を提供することである。」⁽²¹⁾「我々の内的発話、発話意図に於ける音の相関項が、形相特性や余剰的特性を排除して弁別特性だけに限定されると仮定する権利を我々は全く持っていない。発せられた発話では同一の音素が多様な脈絡的、選択的変種によって実現されるということは、この音素が種々な余剰的特性および表現特性と結合することに起因する。」⁽²²⁾

(23) 「我々が世界の諸言語に於いて検出し、それら諸言語の辞書および形態論的な蓄え全体の規定を成す本有的弁別特性は、全部で次の十二の二値的対立になる。1) 母音性/非母音性 2) 子音性/非子音性 3) 中断性/連続性 4) 抑止性/非抑止性 5) 粗擦性/円熟性 6) 有声/無声 7) 集約性/拡散性 8) 低音調性/高音調性 9) 変音調性/常音調性 10) 嬰音調性/常音調性 11) 緊張性/弛緩性 12) 鼻音性/口音性。これら全ての特性を有する言語はない。それらが同一の言語内、また同一の音素内で共に出現するか、両立し得ないかということは、普遍的に当てはまるか、または少なくとも高度の統計的確率を有する含容の法則によってかなりの程度まで決定される。これらの法則は音素体系の層形成を表し、外見上の多様性を限られた一組の構造の型にまとめるものである。」⁽²³⁾

本的な言語の単位であり、二項対立を担う弁別特性の複合によって成立するが、音声線を線として分割して得られるものではない。音素は、より小さな単位である弁別特性を組み合わせることによって成立するが、線の一部として切り取ることができないというのである。

「言連鎖を音素に一貫して分割することが困難であるばかりか、不可能ですらあることは、運動並びに音響の両レベルでの実験的研究によって、既に何度も確認されてきた。」²⁴⁾「これらの障害は、我々が音素のレベルを離れて、言連鎖を弁別特性の継起にまで分割すれば、たちどころに消滅する。様々な特性は連鎖の中で異なった持続域を示すことがある。というのも、特性はしばしば先行する音素のかんりの部分を取り込み、或いは逆に自らが属する音素の途中から始まり、更にまた、次に来る音素の中へと広がるとか、或いは自らの音素の途中で終わるということもあるからである。しかしこの様な特性の相対的な順序は、稀なまた取るに足りない逸脱を除けば、通常同じである。原則として、色々な特性が実現される差異の様々な持続範囲の違いは、言連鎖のある一定の、少なくとも最小の、セグメントの中で、それらが共起することを無効にはしない。従って、これらの特性が共起するその位置は、ぞんざいな省言的話体の場合を除き、維持されるのが普通である。このように、連鎖を継起的な特性へ分割することが、ひいては音素への分割を可能とする。勿論、音素の時間的順序が有意味なファクターであることは否定すべくも無い。」²⁵⁾

線を音素へと分割しようとする時の困難とは、運動面と音響面とで順序が逆転する場合がある、音素の境界線が特定できない等の事態を指す。これは、連続する線の中にそのまま音素の切片は含まれ得ないということである。そして、弁別特性がその継起と境界を正確に特定するということは、弁別特性の繋がりが音の線状性と重なるということであろうか。実際にはそこでは線状性はいかなる居場所も用意されていない。弁別特性の継起は、あくまでも単位の相互関係を規定しているに過ぎない。弁別特性は同時的に重なり合い継起的に繋がっていく。これによってヤコブソンは、言連鎖を線状ではないものと規定するのである(脚注²⁴⁾)。このことは物理的な音の音塊の様相を考えればごく自然に理解できる。音は常に複合的で相対的な区別しかできない、幅を持ったものだからだ。弁別特性の複合的な継起は物理的な音の様相にそのまま重なり合うのである。しかし、それではソシュールによって言語音に線状性が想定され、それが強い影響力を持ち続けたのはなぜかが結局分らない。線状性には単なる誤解では済まされない明確さがあるのは確かである。いずれにせよ、言語の機能的な単位を最も妥当な仕方と規定すると、相互の関係性の連鎖としての継起性だけが、線的なものの図式に近い。そして、そ

(24) 「二つの音素を同時に発することはできない。だが、幾つかの弁別特性を同時に発することは、完全に可能である。単に可能であるだけでなく、それは普通に行われていることだ。音素は複合単位であるから。」²⁵⁾

の継起性は、ある程度の長さを持った弁別特性と、殆ど長さを持たない弁別特性とが寄り集まって不定型な音素領域を作り、疑似連鎖を成しているのである。その様相は、とても明解な線の美しい姿とはほど遠い。

言語の音声的継起が理念的な線状性に導かれていると考えることはできない。理念的な線状性が言語音を際限なく延長するなどいうことになれば、言語は直ちに音声から分離してしまうだけである。弁別的な機能だけがひたすら繰り返していくような発話は存在し得ない。発話の延長は、弁別的な機能を保つ限り、少なくとも意味への交換なしには成立しない。発話の全体が意味識別機能を完全に欠いている特殊な言語音の使用が観察されることもあるが、このような事例は、ヤコブソンにより相似性の異常として分類された失語症の症状に相当する²⁷⁾。相似性が失われて隣接性だけが残ることにより、弁別機能は次第に体系性を失って画一化し、最終的には弁別機能も崩壊していく^(脚注25)。線状性が発話を導いていたのではなく、隣接性という個々の関係が断片的に継起性を成していたように見えるだけである。また、同じ理由から、理念的な線状性が言語の音声的継起の直接的な抽象であるとも考え難い。言語は、音声内から発して、漸進的、再帰的、循環的に活動するのであり、理念的な線状性からはむしろ遠ざかっていくのである。いずれにせよ、線状性と言語とは、まずその音声的な原点に於いて基本的に重なり合わない。

3.2 言語記号の多重性

言語音は、その最も基本的な単位である弁別特性の段階で、線状的ではないにしろ継起性を保っているように見える。しかし、もし仮に線状であると仮定したとしても、その継起性の線は一本では済まない。意味を想定して、統辞論的な構造化の線を記述することもできるが、その前に音声の段階で既に関係性の線は増殖していると見なすことができる。言語が一本の線状性から外れるという事例は、理念的な線状性を提起しその後の記号論に大きな影響を与えた当の言語学者ソシュールによって研究されていた。ソシュールによる作詞法に関するいわゆるアナグラムの研究は、詩人が音声的な継起性を何重にも作り上げることになるある種の規則を発見することを目標とした。この規則の発見は、差異によって成り立つ体系としての言語が具体的な構造として持っている拘束条件を解き明かすという、一般言語学の目的に合致していると思なすこともできる。だが、もしもある種の規則性が抽出できたとしても、それが詩人を実際に拘束していたものなのか、それとも後から幾らでも可能になる過剰な読み取りの規則に過ぎないのかを確かめる方法が無かったのである。その規則を実際に詩人が意識していたのかど

(25) 「脈絡の構成要素を合体させるものは隣接性という外的関係であり、代置集合の基盤となっているものは相似性という内的関係である。」²⁸⁾

うかを、過去の作品に関して確認することはできない。その原理的な不可能性の前で、ソシュールは研究を断念したのである。ソシュールはアナグラムに関して以下のように述べている。

「たった一つの語を変えたり移動したりするだけで、アナグラムに関して必要とされる幾つかの組み合わせが、殆ど必ず混乱してしまうような体系に於いては、アナグラムを作詞法の装飾的な遊びと見なすことはできない。それは詩を作るものが望むと望まざるとに関わらず、作詞法の基礎となる。」²⁹⁾「いかなる時代にも、いかなるジャンルに於いても、詩句の音節数を満足させることのみで成り立つラテン語詩の創作方法が存在した試しはなかったと推論される。韻律の他にも、何らかの語もしくは名詞の音のパラフレーズが、いわば並行的な関心事として詩人を拘束していたのである。このような法則は、韻律の条件とは全く違ったやり方で、詩人が選びうる表現や組み合わせの全てをあらかじめ支配している。もしこのようなものが存在するならば、それは宿命的に、殆どあらゆる文書で著者が言葉によって思考を形作るときにその形を決定する基礎、本性は嘆かわしいものであるが、その効果は避けがたい基礎となるだろう。」³⁰⁾

言葉には主要な一本の線以外に何本もの線が見つけれられるが、それが不規則であれば偶然的なものということになり、あまり問題にはならない。だが、その全ての線の並行に対して規則が見いだせるならば、それらの規則は主要な線を更に強く線へと拘束する作用を持つに違いない。ソシュールはこの研究を進める中で、線に対する勝利という言葉を使っているが、これはむしろ線状性の強化に繋がる研究である。主要な線上の様々な選択の自由度が、別の線を巡る諸規則によって狭まるかあるいは全く無くなり、詩句の継起性は殆ど決定的に変更不能なものとなるからである。ソシュールのこの研究を紹介した評論家ジャン・スタロパンスキーは、この研究に対して疑問を投げかける。つまり、音声の単位がある程度の範囲に配分されている時には、そこからどんな名詞でも読み出すことができるだろうということである。

「実際に、一つの詩句または一連の詩句の中に音素が広範囲に広がっている場合、既に十分な材料が提供されて、詩句の創作に先行すると想定された短い名詞の素材を後から拾い上げることは当然可能なのだとは言えないだろうか。イポグラムは詩の創作を導く動機であるどころか、読者の反省が産み出した亡霊に過ぎないのかもしれない。」³¹⁾「イポグラムの調査を続けるにつれて、ソシュールは、ただ一つの詩句の下に隠された名詞を、ますます数多く読みとれるようになった。ジョンソンの詩一行の下には、なんと四つの名詞があるのだ。しかしもし彼がこの調子で続けたなら、じきに氾濫が起きたことだろう。彼の訓練された眼には、可能な言葉が、引いても押し寄せる波のように際限なく浮き上がって見えたことだろう。」³²⁾

主要な線の上に様々な線が断片的に次々と浮上するような現象は、確かに言語にとって宿命的な多産性であるとも言える。そして元々その様な多産性を頼りにして発話が行われていても

不思議ではない。ソシュールの研究は、その意味では音声的連鎖の中にその規則の機能する場を集約させず、体系を言語的思考の多重性の中に限定する限り正当化することができる。すなわち、面的な発散の場へと広がる運動の中心線として、あるいは複雑に交錯する諸規則の集約する理念的な中心線として、言語を二重化する限りに於いて有効なものとなる。音声言語はあらかじめ線へと集約されているとは言えないし、線から発するとも言えないのである。ソシュールのこの研究を出発点とした言語分析の方法が、記号分析学者のジュリア・クリステヴァによって提案されている。それに依れば、言語は並行的な機能を本質的に持っており、常に二重化されたものとして分析されるべきであるということになる。

「我々はソシュールが『アナグラム』で述べている以下の諸原理を受け入れることにする。

- a. 詩的言語は言葉の本来の形に、第二の、人工的な、いわば付加的なあり方を与えている。
- b. 諸要素の間には、対によって、また韻によって対応関係が存在する。
- c. 詩的法則は二項的であって、文法法則を侵犯するに到る。
- d. 主題語（更には一つの文字）の諸要素は文書全体に拡がっているか、或いは一つないし二つの語のような小空間に凝縮している。このような詩的言語のパラグラムの捉え方は三つの重要な主張を含んでいる。A. 詩的言語は唯一の終わり無きコードである。B. 文学の文書は書くこと―読むことという二重体である。C. 文学の文書は諸結合関係の網である。」³³⁾

クリステヴァの解釈は詩的言語に的を絞ったものであるが、言語に於ける理念的な線状性の完全な多重構造を規定したものでもある。言語は、詩的言語を例に取った場合、幾らでも根拠を持った音声の繋がりや意味の関係を派生させることができ、幾らでも関係性を張り巡らすことができる。そして、その基本的な構造は、書くことと読むことの二重化、即ち書き込みと読み取りの並行状態である。これは、一義的な文書でないことから生ずる例外的な事例を指しているのであろうか。しかし、この二重化した言語は、書くことと読むことの両面から無限の規則で拘束される強固な体系として規定されたのであって、決して余剰的な自由度をちりばめた装飾ではないのである。この二重化によって言語が面的なものと思なされるからと言って線状性が消えたわけではない。線状性は理念的なものとして複合化され、複雑な網状に交叉し合い、文字の線状性の様な一本の線からは完全に分離されたものになったということなのである。

この二重化の様相を更に理念的に完全なものにすると、ソシュールが古代ストア哲学からの伝統を引き継いだ能記と所記による言語記号の二重構造に行き着く（脚注26）。ソシュールは、言

(26) 古代ストア派の論理学に於いて、言語記号は、声あるいは名前に相当する能記、概念に相当する所記、素材に相当する指示対象という三つの区分が考えられた。この考え方はアウグスティヌスに引き継がれて神学的な応用が行われる。この伝統は近代哲学の中で、例えばポール・ロワイヤル論理

語体系を観念と音との二つの要素の恣意的な関係によって成り立つ純粋な価値の体系と規定した。この考え方を発展させて言語の体系性を音声的な素材から独立したものとする見方は、言語を音声に内在する弁別機能の活動として具体的に研究しようとしたヤコブソンによって批判された^(脚注27)。しかし、純粋な価値の体系を音声言語に限定しないで、より普遍的な記号体系として抽出しようとする場合には、この考え方は非常に有効な意味を持っていた。ソシュールによる観念と音の二重性は、ある意味では二項対立の理念の重要な原点でもある。この二重性は、決して切り離すことのできない二つの面或いは線に関する二重性であり、その隙間のない結びつきが生じる基本的な要因を、ソシュールは恣意性であるとする。そして、二つの面或いは線の各々の内部では、記号相互の関係は差異である。概念の差異と音の差異とが二重になることによって、両者は積極的な辞項を持たずに差異のままで体系を作りだすことができるのである。

「言語が純粋価値の体系でしかあり得ないことを会得するには、その働きに於いて活躍する二要素、観念と音とを考察するだけでよい。」³⁷⁾「言語はまた、一葉の紙片に比べることができる。思想は表であり、音は裏である。裏を分断せずに同時に表を分断することはできない。同じく言語に於いても、音を思想から切り離すことも、思想を音から切り離すこともできない。できたとしたら、それは抽象作用によるしかなく、その結果は純粋心理学か純粋音声学かの仕事となろう。それ故言語学の仕事場は、二つの秩序の要素が結合する境界地域である。この結合は形態をうみ、実体をうみはしない。」³⁸⁾「言語的事実によって結ばれた二つの領域は、ただ漠然、無定型であるのみならず、なおなにかしかな観念に対しなにかしかな聴覚的切片をあてがう選択は、全く恣意的である。もしそうでないならば、価値の概念はその特質の幾分かを失うであろう、というのもそれは外部から押しつけられた要素を含むことになろうから。ところが実を言えば、価値は全く相対的なものであって、さればこそ観念と音との連結は徹底的に恣意的なのである。」³⁹⁾「恣意的と差異的とは、二つの相関的性質である。」⁴⁰⁾「所記をとってみても能記をとってみても、言語が含むのは、言語体系に先立って存在するような観念でも音でもなくて、ただこの体系から生じる概念的差異と音的差異とだけである。」⁴¹⁾

学に於いて、能記と所期の二分割へと姿を変える。ソシュールは、素材の同一性に依存しない記号の二面性を説明するために、この二分割を価値体系の形式的な成り立ちの構造として提示する。

- (27) 「言語形式の平面から実質を人為的に切り離すならば、諸々の対立の構成が言語コードの内奥に本来的に備わるところの明らかに形式的かつ論理的な操作であることが説明できない。更にまた、言語体系から独立した音声実質という考え方は、言語音が専ら言語の必要のために作られ、従って、その目的に適合したものであるという事実を全く無視している。」³⁴⁾この批判は言語代数学あるいは言語素論が音素論と音声学とを完全に切り離そうとする傾向に対してのものである。能記と所記との関係の恣意性を強調するならば、言語を代数的な体系として抽出するという傾向に発展し得る。この傾向は音声を使用しない記号体系の分析に対しては有効な図式を提供することとなった。このような応用は記号学者のロラン・バルトやウンベルト・エーコに見ることができる³⁵⁾³⁶⁾。

恣意性と差異性の交叉によって成り立つ、純粹価値の体系としての言語の二重構造は、その形態を音声言語に於ける観念と音という二つの領域に必ずしも結び付けなくてよいものにする。言語の実質性を離れて、論理的な整合性を持った理念的な構造の明確な模型として、二重構造を抽出し仕上げるのが可能だと考える構想が出てくるのは必然的である。純粹価値の体系は、規則に従って運用される諸々の記号体系一般に適用できるものであり、言語機能の記述をそのような一般性へと高めようとする試みは、言語学者ルイ・イエームスレウによって行われた。イエームスレウは、形態と実質、観念と音という言語の二重構造を、表現と内容という能記と所記に相当する言い方を元にして、交叉的に拡大させる。言語は、その様な一般構造の中では、観念が内容実質、音が表現実質として、実質の側に分類される。言語の純粹な構造は、表現と内容という一般的な言い方によって、構造自体を段階的に拡張していく原理となる。

「記号機能はそれ自身では連帯関係である。表現と内容には連帯関係があって、必ず相互に相手を前提とする。表現はそれが内容の表現であるということによって始めて表現なのであり、また内容はそれが表現の内容であるということによって始めて内容なのである。したがって、人為的に隔離する場合を除いて、表現の伴わない内容、或いは表現なしの内容は存在し得ないし、また内容の伴わない表現、或いは内容無しの表現もまた存在し得ないのである。」⁴²⁾「言語体系の最初の成分部分分割は、その最も包容範囲の大きい二つの範例、即ち表現の側と内容の側を立てるところまで行くことになるであろう。表現の線と表現の側、そして同時に内容の線と内容の側を示す共通の名前として、我々はそれぞれ表現面と内容面という名称を用いた。」⁴³⁾

表現と内容の二重構造を音声言語に特定しないものとして規定するに当たって、イエームスレウは、この構造を文字にも適用可能なものと考えている。文字が言語からの派生であるという主張と、綴り字方法の違いが言語形態とは別の形態を生じさせるという意見に対して、イエームスレウは次のように答える。

「一つの表出が他の表出に対して派生したものであるということは、この表出が事実、ある言語形態の表出であるということを否定するのには役立たない。これに加えて、派生したものとそうでないものとの区別が必ずしも確かではないという事情もある。アルファベット文字の発明が先史時代の影に隠れているということを忘れてはならない。従って、この発明が音声分析に基づくものであるという主張は、色々立てることのできる通時的見地による仮説の中のほんの一つに過ぎないのである。この発明はまた、言語構造の形態的分析に基づいたかもしれないのである。」⁴⁴⁾「それは言語形態はある実質の中に表出されているという一般事実を変更するものではない。しかし、この観察は全く同じ内容体系に、色々異なる表現体系が対応し得ると

いうことを示している点で興味がある。この結果、言語理論家の為すべき仕事は、単に実際に存在する表現体系を記述することだけではなく、また一般にどんな表現体系がある内容体系の表現として可能であるのか、またこの反対であるのかを計算することでもあるということになる。」⁴⁵⁾

言語形態が原理的には実質を選ばないということは、形態と実質の結びつきそのものが恣意的であるということになる。この恣意性は当然同一性ではなく差異性をめぐるものである(脚注28)。ここには、形態と実質の差異が各々の内部の恣意性に依っているという関係も含む。この主張によって、理念的な線状性はとりあえず二重化された平行線として設定されるが、その線は最早音響の時間線とも、文字の連鎖線とも結び付かない。この平行線は相互の差異によってのみ成立するのであり、更に段階的な交叉によって、構造の分裂を繰り返す。線はその構造から延長されることはなく、つかの間の線の上に更につかの間の線を重ねていくという形でしか前へ進むことはない。表現と内容の二重構造はその上位の構造においてそれ自体が一つの表現となる。表現と内容の結合が表現となるような言語は共示言語と呼ばれ、それに対して表現と内容の結合が内容となるような言語はメタ言語と呼ばれる。表現が内容を表すのが表示であり、表現と内容の結合が別の内容を表すのが共示ということであり、これによって二重構造は三重構造の部分であることが明らかになる。この三重構造は、意味を理解する、あるいは翻訳する等の、通常の言語に関する理解の構造である。つまり、意味の理解は、脈絡の形成を通して線状性を理念的に構築しているわけではないのである。三重構造は、線を延長するのではなく、線を交叉させる。その交叉は、脈絡の漸進的形成に於いて無限に多重化するのである。

「文書の無限性(生産性)」という前提の元では、それぞれ自分の記号類に属する二つの記号の間には、いつも翻訳の可能性が存在するであろう。ただしこの場合、記号類はそれぞれ自分の共示体と連帯関係を持っている。そして翻訳の可能性というのは、ここでは表現の代入という意味である。」⁴⁶⁾「今や、ある記号類とある共示体との間に存在する連帯関係が記号機能であることは明白になったように思われる。なぜなら、記号類は内容としての問題になっている共示体のための表現だからである。」⁴⁷⁾

共示という関係がなければ、言語記号は意味生産的な機能を持たないことになるが、共示によって、表現の線状性だけが結合され延長されるということはある得ない。というのは、一旦、音声という実質を離れた以上、理念的にでも線状性を維持させる動機はないからである。

(28) 形態と実質の各々にある辞項の同一性を想定して、それらの結びつきを考えるならば、そこには恣意性はあり得ない。実際に各々の内部に単位を同定する場合は、両側面の結合は必然的と見なさなければならない。両者が恣意的であり得るのは両者が共に差異としてだけ成立しているときである。

むしろ、表現の線状性は共示の共示によって次々と失われるのであり、線状性は具体的な形をとって現れることは決してない。線の複合性は増殖によって線状性があつたはずの虚構的な場所、即ち音声の継起性から益々遠ざかることになる。哲学者のチャールズ・サンダース・パーズによる、類似記号、指標記号、象徴記号という記号の三分法の中の象徴記号の役割や、哲学者ジョン・オースチンによる、事実確認的発話に対する行為遂行的発話の役割などに、同様の言語的な理解の多重構造を見ることができる^{48),49)}。抽象的な言語、論理的な記号、日常的な発話などに関して等しく浮上しているこのような類似の構造が、言語的な理解には常に線を線として延長させない基本構造が存在することを表しているのである。活動体としての言語に於けるその様な場になぜ線状性があるように見えるのかは、従って活動体としての言語の問題ではない。

3.3 言語の単一性

音声として機能する言語は、幅を持った音響の物理的性質を、複合的な二者択一の場合としてそのまま利用している以上、線状ではあり得なかった。理解されるものとして機能する言語記号の基本構造は、音声から離れて多重的な関係を無時間的に構築している以上、線状である必要がなかった。それでは、更に大きな言語の場で、言語は時間の大まかな流れとしての線と結び付くのであろうか。共時態と通時態、静態と動態といった言語の総体としての様相には、確かに個別的な場を越えた線が描かれているように見える。だが、このような問題設定は、恐らくいわば歴史的総合といったような哲学的次元の問題であり、言語と文字との関わり方の具体的な場面とは差し当たって直接関係がない。言語と文字とは、その密接な直接的具体的な関係に於いて、言語を根拠として目の前の線であると見なされているのである。そして、言語に関する線状性の根拠が実際には希薄なものでしかないにも関わらず、言語と文字との関係に於いてはそのことはあまり問題にならなかった^(脚注29)。言語を完全に文字から切り離し、言語は線状性とは全く無関係であると言った方がよいのか。そもそも、言語はなぜ線状であると見なされるのか。そして、この場合の奇妙な自明性とは何なのか。むしろ、線状性の問題は、言語の事実ではなく、言語に対する観察の構造にあると言えるのだろうか。

言語が線状であると見なされる場合には、必ず言語は音声言語でなければならないという必然性が引き合いに出される。音と聴覚という物質的な媒介の問題ではなく、その時間的性質が

(29) グディはむしろ文字の使用が方向という因子を含んだ線状性を言語へ付加すると考えている。そのように文字が言語に与える影響の大きさを考慮するならば、文字の線状性が言語の時間性によって作られているとは最早言い切れないのである。「話し言葉の線の性格は、次のような意味で明らかに強調され過ぎているとも考えられる。つまり話し言葉の線は直線ではなく、また特定の空間的方向性を必然的に持っているのでもなく、単に時間的なものに過ぎないからである。この点で話された言葉は書かれた言葉と異なっている。」⁵⁰⁾

強調され、それがそのまま意味の文脈に関する認識にも移植される。音が時間的であるということ根拠にしているというよりは、更に強く全てが時間的であり線状であると見なされているのだ。線的な図式を持った時間性が、いわばあらゆるものを超越しているかのような認識の仕方であるが、これがごく一般的な捉え方であり、言語学に於いてもこれが少なくとも文字との関係に於いて自明のこととして前提されるのである。言語の線状性の問題に関する最も重要な問題提起となったのは、ソシュールによる音声言語の線状性という提起である。そこには線状性の規定から来る様々な論理的帰結の事例が含まれているが、特に注意すべきなのは、言語が単位の複合性ではなく単一性によって始めて具体的に機能すると想定されているらしい点である。思考と音との対応は、複合的な対応ではなく、一方の前で他方が消されるような完全な交換によってのみ単位を成す。ソシュールによる提起は、単位の単一性に関する問題の延長線上に置かれている。

「ここに、まだ誰も十分に引き出したことがない音的素材の重要な性格が一つある。それは、音連鎖として現出するという性格だ。これは、直ちに、ある時間的な性格を、一つの次元しか持たないという性格を引き起こす。それを線状の性格と言ってみてもいい。言葉の連鎖は、否応なく一本の線となって私たちに現れる。このことは、これから立てるあらゆる関係に対して巨大な射程を持っている。様々な質の差異（母音間の、或いはアクセントの差異）は、ただ継起的にのみ現れるに到る。人は強勢母音と無強勢母音を同一に持つことはできない。全ては一本の線を成すので、例えば、それは音楽の場合と同じだ。」^[51]「音的素材は、いつでも同一の方向にしかなく、二つの記号の同時性を認めない。」^[52]「思考に対する言葉特有の役割は、音的、物質的手段たることにあるのではない。それは、思考と音の合一が不可避的に各単位に到達していくような、そういう性質の中間地帯を作りだすことにある。本来混沌とした思考は、分解され、言葉によって諸単位に配分されることで、いやでも明確になる。けれども、言葉は一種の鋳型であるなどと言う陳腐な誤りは陥ってはならない。それは、言葉を何か固定した堅固なものを見なすことだが、音的素材にしたってそれ自体では思考と同じくらい混沌としている。鋳型どころではない。音を便利に使ったその様な思考の物質化などとはあり得ない。そこにあるのは、思考—音が言語学の究極的単位としての諸区分を含んでいるという、どこか神秘的なこの事実である。音と思考が結合され得るのは、これらの単位によってでしかない。」^[53]

一つの次元、言葉の連鎖、継起的な現れ、これらは単位内部の物質的連続性ではなく、単位が単一でしか現れ得ない性質を専ら示している。思考と音との関係は、音の線にそって思考が明確になるというようなものではなく、究極的な単位へと集約するということである。ここでは、線というよりは単位の場合に於ける思考と音との結合ないしは交換が点的に成立しているということが特に重要となる。つまり、音声単位の複合体がある思考と対応するなどということ

はなく、あくまでも音声と思考が単位の一貫性に於いてのみ結合しているということである。このような単位の一貫性を巡って、音声と思考は単位から発生するというよりは単位へと消滅すると思えるべきであり、このような時間的な空虚さが音声と思考との宿命的な結合というよりは同一性を成しているのであろう。確かに、交換に於ける消滅は点的な時間に於いてしか起こり得ず、継起的でしかあり得ない。このような消滅の継起を時間に於いて繋ぎ止めているのは、実際には時間的な線状性であろうはずがない。強いて言うならば、それは空間的な同一性である。発話の場が同一の相対的位置に止まっているということだけが継起性の線を保つのである。従って、言語の線状性とは相対的静止状態の位置に他ならず、これは即ち時間的にも空間的にも点である(脚注30)。

相対的静止状態の言語的性質は、それこそが音声的性質の反映である。音声はその消滅によって位置の同一性に全面的に依存する。同じ位置に止まることは、最早言語の機能ではない。言語はそれに関してなにも役割を果たしてはいない。音声の物質的連続性は、相対的な位置の同一性には大した役割を果たさない。言語は非連続的に機能するのであり、無音状態も言語に於いては非関与的ではないからである。言語は、音声の物質的連続性や、発話者の個別的な音調の同一性によって代表される身体性などの、全く外的で偶然的なものの助けを得て、始めて線状性を持っているものに見える。それが外的であって非本質的な要因であるからこそ、線状性はその本質というよりは、むしろ全く自明のものとして前提されるのである。ここに、時間性と空間性に関する哲学的あるいは物理学的議論を持ち出すべきではない。むしろ、ここでは時間性や空間性の、言語にとっての無意味さが強調されるべきである。言語は、いざというときに時間性や空間性を引き合いに出せば、一次元の線という如何様にも多次元展開が可能な便利な道具として正当化されるわけではないからだ。

言語をその伝達機能に的を絞って分析すると、ある程度、線状性の正体が明らかになる。発信者と受信者の間には伝達経路があり、伝達機能の遂行に於いては、特定の速度で伝達内容が伝達経路を移動していく。このような図式の中では、線状性はその伝達経路内での個々の信号が瞬間的にとる位置の配分にあるだろう。伝達経路の性質の違いは、ここでは問題にならない。空気であろうと銅線であろうと変わりはない。符号化と復号化の変換容量と伝達経路の容量は常に有限であり、そのため変換も伝達も順次行われる。有限な容量の反復的使用によって、変換と伝達は無限の伝達内容を処理することが可能になる。伝達経路内では、伝達内容が

(30) ヤコブソンは言語的発話の同一性という問題が、物理学に於ける観察の問題と同様な困難さを孕んでいることを指摘している。「観察される対象と観察する主体との相互作用、および観察者によって得られる情報の観察者の相対的位置への依存性は、今日物理学者によっても言語学者によっても認識されているが、しかし言語学に於いては全ての必然的推論がこの必須前提からまだ引き出されておらず、例えば、話し手と聞き手の立場を混同するとき研究者は困難に陥る。」^[34]

複合的かつ線的に連なり、確かに発信者と受信者の間に引かれた一本の線が言語の線状性のようなものとして浮かび上がってくる。しかし、最早このような図式に於いては、伝達が音声言語に限定されないことは言うまでもない前提条件である。このような伝達機能の数学的記述の元になる図式に対しては、言語は、その伝達の不確定的な複合性の幅によって自己同一性を主張するしかないだろう(脚注³¹)。その主張には、最早線状性の入り込む隙間は全く無いのである。そして、伝達内容とは言えば、復号化の保留による伝達経路での滞留としてしか確認することはできない。ただ、この滞留はただ単に同質化された遷移確率に過ぎないのではない。滞留が固定性と化する時、そこには過剰な線状性の萌芽が見いだせる。ただ、言語は絶対的に復号化に依拠する限りに於いて、このような線状性からも必然的に遠ざかるものである。

4. 文字の線状性

4.1 文字の内部

文字は通常線で表記される。いわゆる言語的な線状性のことではなく、文字を筆記する際の線である。これは筆記用具の偶然的な特性だけで説明されるべきではない。文字の表記には動作を線へと集約する傾向があり、この傾向は筆記用具の先端や眼の焦点の動きによって差し当たって支持されている。実際の文字の形状に於いて一見例外に見えるものもある。例えば古代メソポタミアで使われた楔形文字は、葦の尖筆を粘土に押しつけるために、立体的な三角形の窪みの形状をとり、それにより現在に於いて楔形文字と総称されている。この窪みの形は必ずしも線で成り立っていると言えないが、全ての楔形文字の起源であるシュメール絵文字は、元々楔形ではなく粘土に線で描かれた線文字であった。その線による構成の仕方は、楔形文字の中でも決して失われてはいない。また、古代エジプトの聖刻文字は絵画的な文字であり、しばしば石材への面的な彫り込みを伴っている。そして、この文字も神官文字、民衆文字という二つの筆記体に於いては、全てが線によって構成されて成り立っている。少なくとも線としての筆記順序がそこに存在したことは確かである。この線的な筆記を全ての文字に関して確認することは実際上不可能であるが、手による筆記が線的な運動を一定の順序で制御していたことは

(31) 言語はただ単に基本単位を抽出して情報として符号化するだけでは、関与的な特性を全て伝達できない。例えば、身ぶりなどの視覚的要素、アクセントや速度などの付帯的要素などがどの範囲まで伝達に関与しているのかを限定することができないのである。つまり、言語をある特定の規格に従って符号化した場合、言語はそこに含まれなかった状況の全てを根拠に、符号化された情報に対する独自の自己同一性を主張できることになる。「余剰的特性は弁別的であれ形相的であれ、またそれが単一特性であれ複合であれ、共起的特性や隣接の特性を同定することに役立つ。また、余剰的特性の補助的役割は過小評価されてはならない。状況によっては余剰的特性をして弁別特性に取って代わらしめることさえある。」⁵⁵⁾

ありそうなことである。書き込まれている以上そこには人為的な手の動きが予想される。ここでは文字が線によって十分筆記できるものであるということを確認しておく。線的な筆記の可能性ということだけで文字は具体化され得るからである。

印章を使った文字や、印刷、機械筆記などは、線状の手の動きを伴わないが、それらが独自に筆記線を排除した完全に面的な文字を形成することは実際にはなかった。確かに面的に変形された印刷書体は存在する。また完全に面的な文字を創作することもできるだろう。文字の内的な形態は、必ずしも線によって構成される必然性はないからだ。その場合には、文字の面的な展開は外的な線状性に依存する限りでの絵面的書法への粒状の統合と見なすことができる。文字の外的な形態が線状であるからこそ、文字の内的な形態は面的に拡散すると同時に点的に集約することができる。もしも、外的な線状性が無ければ、面と点との関係は文字ではなく絵画と見なされる。外的な線との関係に於ける内的な面と点とのせめぎ合いが文字内部の基本的な形態を作っている。しかし、文字の内的な形態を、初めから外的な形態によって用意された場に於ける力学として記述すべきではない。その様なやり方は、文字の外的な要因として線状性を前提してしまうのであり、その前提が言語を線状性の鋳型と決めつける元になっている。従って文字の内部に於いては、微細な筆記線による面と点とのせめぎ合いを考えなければならないのである。また、文字の線的な筆記という問題は、面と点とのせめぎ合いの前線としての構造的な場に於けると同時に、文字の内部を外部と結ぶ具体的な線分の側面からも採り上げる必要がある。文字内部への導入線および文字外部への脱出線という二つの役割が筆記に於ける線によって賄われているならば、外的な要因を越えた文字の過剰な線状性が根拠付けられることになる。

このような筆記の線が言語的な弁別とは関係がないことは明らかである。線はむしろ差異を同一化する連続性の役割を持ってしまう。線によって差異が消されるという機能をあえて考えることもできる。筆記の線は、声の消失によって純化される差異の認識へ一旦奪われた知覚を、連続性へと再び奪い返す。そして、その差異を消去する機能は音韻的な差異だけでなく言語的な弁別のあらゆる差異に対しても有効となる。差異による体系のおかげで生きているのが言語だとするならば、文字の筆記線は差異の消去によって言語を一旦死の世界へ移行させる。先史的な図示表現は、ルロワ＝グーランの言うように抽象表現から始まったと考えられ、それによって言語の直接的な介在が想定されるのであるが、言語の関わり方は逆に考えることもできる。すなわち、旧石器時代の線描によって、言語は差異の機能を停止され、端的にその完全性へ即ち死の形態へと追いやられる。言語は図示表現に反映したというよりは取り戻すことのできない図示表現に封印されたのである。線は先史的な書き込み一般の原初的な形態であり、言語が必然的に向かう死への飛躍であって、これをあえて言語的な抽象化の産物と解釈する必

要はない。言語は差異によって構築された抽象物として活動するが、差異を停止することによって具体物としての完成をめざすとも考えられるからだ。ただ、このような線描から始まる筆記線はただの線であり続けることはできない。線は交叉と複合と接合によって集積し、ある特定の場所に寄り集まる傾向がある。この段階で線を巡る集約と発散の二つの方向性が共存を始める。

染色と線描との関係には注意すべきである。これらは旧石器時代の同じ時代に現れることが知られており、絵画的な図示表現にはこれらが共に用いられる場合もあるが、両者の違いははっきりしている。染色は元々身体装飾に使われたものと言われているが、原初的な書き込みに於ける染色の使用は、差異の機能を停止する線描とは区別すべきである。染色に於ける色の変化は差異の機能を停止せずにそれと協調して差異の体系を拡張する。色の差異の知覚が個別言語の語彙体系によって決定されることは、言語が知覚を構造化する場合の事例としてよく知られている。色の認識は差異に向けられ、線の認識は同一性に向けられる。染色による色の変化の使用は、場合によって線描と安定的に共存することはあっても、それはルロワ＝グーランが指摘するような抽象的図示表現の発展形態である写実的図示表現に於いてのことである^(脚注32)。染色と線描は、はっきり違った認識作用をもたらし、線描はその部分的共存に甘んじてはいない。線描は言語と類似した表現である線と面との共存的絵画に対してははっきりとした抵抗を示してそこから離れていく。そのため言語は線の前で機能を消すことになり、同時に色の変化も線の背後に消えていくのである。このような面の消去としての線は幅を持たない理念的なもので、それ自体差異的なものと言えるのではないかという疑問が生ずる。確かに線がその背景の消去によって集約的なものとなり、更にはその幅と長さをも消去された点的なものへと向かって機能する場合は、それは差異的であると言える。そして、これが線の集積によって擬似的に起こる面と点とのせめぎ合いの場を形成する元になる。つまり、筆記線はその点的な集約を、線の集積によって擬似的に表現するような方向へ迂回的に進めるのである。

この面と点とのせめぎ合いは、あくまでも線の集積によって具体的に描かれなければならない。その集積は線の交叉と複合と接合によってのみ行われる。個々の線描運動としてみた場合、線は常に平面上を横に流れる。拡散と集中という遠近的な展開が直接面と点を描くことはあり得ない。なぜなら、直接的な面の描写は差異の円環を閉じてしまうからである。全体の抽象化によって導き出される同心円的な拡張は、従って消えることのない個々の線によって保留されることになる。拡張の保留は、線の集積と同時に細かく飛び出した線の先端部を有効なも

(32) 原初的な線描は経年変化によって単に色が消えてしまったとも考えられるが、線を書く動作と色を埋める動作とが異なった段階であることは十分想像できる。それらが簡単に組み合わせられたとは考えにくい。そこにはある程度の総合過程が必要であっただろうし、その過程が抽象表現から写実表現への発展過程に含まれていると考えてもよいだろう。

のとする。この先端部によって集積の場への導入と、そこからの脱出が特定できるのであるが、この二種類の外線を可能にする先端部の個数が問題となる。文字の内的な筆記線に於いては、個々の線は書く順序と方向がほぼ決まっているのであるが、それはあくまでも慣習的なものである。文字の内部を固定性の場としてみた場合はその様な運動の継起は全く無意味である。線は一本一本継起的に筆記されると見なすことはできない。初めから時間の継起性に頼ることはできないからだ。印章、印刷、機械筆記などにはその様な継起性は無い。形態には時間的な継起性は含まれない。とりあえずここでは個数を限定することはできないが、線の先端部である以上その個数が偶数になることを確認しておく。即ち、導入部と脱出部は常に個数が一対一に対応している。必ずしも導入部と脱出部は一本の線で繋がっているとは限らないが先端部の個数の偶奇性は重要な意味を持つ。導入があれば必ず脱出もあるという線の持つ性質は、この線的な筆記の特徴である。

この導入と脱出の線は様々な形で現れるが、筆記線の複数の集積場を結合するという場合が最も典型的である^(脚注33)。筆記体の文字は繋がった状態で書かれるが、線の集積への導入と脱出によって先端部の機能は特定できる。集積する線の中に連結機能を担う線を楷書体の書体や印刷書体に持つのは、デーヴァナーガリー文字などのインドの文字によくある特徴である。文字が連結線を持つ場合、導入と脱出の方向は各々一個に限定されることが多いが、場合によって各々方向が二個以上になることもある。漢字のような方形文字の使用が特殊な用途に使用される場合、例えば縦横二方向に連結する様な場合に起こるこのような事例は、しかし文字の同心円上のせめぎ合いを強化することになり個々の筆記の線を弱めてしまう。線の方向性が放射状に分散すればするほど、線の集積は点と面との関係と重なり合ってしまう。連結が二方向になる、すなわち先端部が四方向に分散するだけで、線の集積は絵画に接近し、内部は色の変化の場に還元され、差異的な言語へと回収されることになるのである。このような放射状の分散を避ける方向性の残存は、それ故二つに限られる。このことから、文字の先端部の個数は導入と脱出に対して各々一個に限定されることがわかる。

文字の外的な連結線はこのようにして、線的筆記による文字の内的な線から導き出される。文字の線状性は唯一この文字内部の筆記線にある。この筆記の線だけが文字の具体的な線と言えるものである。この線は単なる構成上の部分線ではない。線の先端部が二本延長可能なものとして外部へと飛び出すことにより、文字の外的な線状性を唯一可能にするような内部と外部

(33) 先端部が直ちに結合線の役割を持つということはない。先端部が文字の内部から徐々に延びてきて互いに繋がるなどという生物的な連想は通用しない。文字はその形態の内部に於いても常にあるものの流用によってしか成り立たない。線描に於ける様々な付加的断片がたまたま機能を成立させることがあるというのが文字の形態の進化である。

を結ぶ線でもある。これによって文字ははっきりと線状であると言うことができる。この筆記の線は明らかに音声言語の理念的な時間線とは全く関係がない。筆記の順序と音素の継起とは何の関係もあり得ないし、それは意味の構成要素とも関係がない。筆記の線はただの純粋な線として固定される突出した特徴を持っている。筆記の線は、発声とは異なるある種の動作から産み出されることができるが、これは動作の循環を完成させることができず一方的に動作を奪い取る^(脚注34)。また、文字は言語とは全く無関係に絵画から進化したと考えることもできない。線描と絵画とは元々その進化の系統を二つに分ける。絵画は染色が線描を統合する形態から進化したもので、線描の純粋な形態からの分化とも考えられる^(脚注35)。線描は線への集約という導因によって説明され、その集約の徹底化が文字へと進化する。そして、その線描に於ける元々の線への集約こそが、言語的書き込みの向かう方向の先端部分である。その先端部分に於いて起こっていることは、活動体としての言語による自らの活動の消去であり、その消去は単なる話されたことの取り戻しの前段階ではなかった。文字の筆記線は言語のどの部分とも対応してはいない故に、それが言語的な書き込みであるのかを確認することは事実上できない。この線は言語的な書き込みと言うよりも活動体一般の書き込みと見た方がよい。活動体に於いて言語はその社会的拡大の主要な身体であるが、それは身体運動と聴覚との関係の構造的拡張と見なされる。しかし、聴覚によってその都度ほぼ完全に取り戻されてしまう循環的活動としての言語は、身体運動と視覚との関係から区別できない。自己の活動として目の前に線を描くとき、その次なる取り戻しに向かって投げ出された線への集約は、言語的でもあった活動体の集約である。従って、身体運動の末端部に線描が生ずるときには、それは言語的な集約と見なす他はないのである。線の背後には活動体との交換が伴われねばならず、線の上には消去の場が浮かび上がる^(脚注36)。言語との対応は、線の集積が点と面との同心円上のせめぎ合いを演ずる場に於いて、個々の線が再び擬似的に消されるときに、その場を単位として生ずる儚い出来

(34) 古代メソポタミアの粘土板には、文字の学習に使われたと見られる試し書きが多数発見されている。筆記の線には、言語の口述筆記の完成された状態からはほど遠い、未熟な線のさまよいが多く含まれているのである。未熟な筆記であっても奪い取られた線はそれが残ってしまう以上、線として成立している。機能しているかいないかという基準は、そこでは厳密に適用されないのである。また、動作の熟練は、文字の完全な回収へは決して向かわない。発声の熟練は意味への回収を促すが文字の熟練はむしろ意味を封じ込める。勿論、美しい文字は読みやすいということも言えるが、装飾的な文字は却って読みにくい。筆記体の文字は、読み易さよりもむしろ筆記速度を優先する。筆記線の熟練は、従って書き込みの熟練でしかない。

(35) 絵画と文字は常に重合的で相互転換する関係にあると考えるべきだが、発達形態に於いては両者ははっきりと分かれている。絵画は、染色の流れが線描を内部へ取り込むような進化として、また線描の流れが染色との統合へ自立する進化として規定できる。それに対して、文字は線描からしか始まらず、その純粋な線の集積としてだけ進化する。ただ、線の集積は常に絵画への混合という圧力にさらされており、絵画の場は即ち言語への回収の場である。その様な進化の過程の中で、文字は常に線描の純粋な進化の場を持ち続ける。文字の進化は、従って線描と染色の混交的進化の中から線の進化だけが取り残されたものと言うことができる。

事である。つまり、言語は一旦線によって奪われ、再びいわゆる文字によって自らを擬似的に取り戻す様に見えるのである。その後の単位の分節に関する問題は、単位と機能の考察に含まれている⁵⁶⁾。

4.2 文字の外部

文字はその内的な形態から連結線を延長するのであるが、果たしてどこまでが文字の内的な線の集積の場であり、どこからがその外部であるのかを実際に判断するのは難しい。線の集積は、点と面との同心円上の均衡の場を作る導因であり、それによって場は言語的差異へと取り戻される。線は、交叉、複合、接合によって、染色から発する絵画に近いものへとその場で行きしようとする。その移行から文字を浮き出させるのは、外へと飛び出した連結線だけである。文字は実際にはこのような連結線を最初から内部にはっきりとした形で持つことはできなかった。内的な線が実際に外へと直接延長されたような文字は、文字の原初的な形とは対応していない。例えば、シュメール絵文字は、数個の切り離された文字を、四角い枠線によって囲われた一つの領域に平面的に納める形で使用された。納められた文字の領域の順序は、枠線として引かれた罫線の連続によって決まっているが、個々の文字は分断しており連結順序も存在しない。この文字を見る限り、文字の内部の線が外へと拡張するとは言えない。だが、ここで重要なのは罫線の役割である。罫線は例えば二本並行線を描くことによって、その間を細長い面として成立させる。シュメール絵文字は、更にその面を分断する罫線によって各々の領域を絵画的な場として区切る。その一つ一つの領域に、線の集積の場が複合的に拡散と集約を共存させる^(脚注37)。この場合に罫線は、内的な線の集積の場へと複合される線の一部であると考えなければならない。二本の平行線は、最終的には二つの方向性を持った一本の連結線の分化であると考えることができる。二本の平行線は、隣の行との境界線としての面的な役割をも担っているため、線の内的な集積とは距離を保っている。この行間の境界線の役割は、隣の枠との連結線の役割と共有されている。このような面的な場はあくまでも絵画的で差別的な、即ち言語的な場であるが、二本の平行線は面的な場から独立しているため消されことなく連結線の役割を二重化している。そこから最終的に全ての線を自立させる形に於いては、罫線は文字の内部へ一本の連結線として再統合されるはずであるが、罫線の使用は実際には文字の連結線の発展

(36) 線描への言語の原初的書き込みに於いては、言語は明確な単位を持った活動ではなく、集約の背後に想定される漠然とした活動としてしか規定できない。それは、そこでは消去されるためにのみ存在した、或いは消去される限りに於いてのみ存在した活動である。

(37) 枠線の中は絵画的な場と見なせるが、点と面との関係が枠の内部で複数の場に分散していることにも注意すべきであろう。線の集積の場は、必ずしも平均的に面と点の関係を描き出すわけではないということである。線の集積の場は端的に線状の連鎖へと移行するわけではないだろうが、少なくとも複数的ではあるということである。

段階に欠かせない。面的に集積しようとする線描は、端的に線だけを延長してしまえばその節目を作ることができずに解体してしまう(脚注38)。端的に引き延ばされた一本の長い線はそれ自身一つの面的な領域として差異へと還元される運命にある。単純な集積と拡散だけでは連結線は発生しない。集積の場を囲い込む枠組みが領域を面的なものとして成立させた後に、枠組みの線は平行線として存続し、面の隣接に伴って延長される。そして、この二本の延長線が、実際上は連結線として機能する最初のものである。連結線として機能する場合には線は一本でなければならないということを先に確認してきたが、そのためにここでは二本の平行線のどちらか一方が連結線であることになる。そしてもう一方の線は隣接する行に属する連結線ということになる。ただ、その所属の選択は状態としてだけ成立し、実際の帰属は不確定なままである。純粋な線描から文字への移行は、文字の内部に関する素描で見てきたような直接的な移行ではなく、複雑で具体的な段階を経て迂回的に進行していく。

野線は、古代メソポタミアの楔形文字、古代エジプトの聖刻文字、漢字などで多用される。これらの文字は絵画的な集積の力が比較的強く、一旦面的な場として囲い込む必然性がある(脚注39)。古代メソポタミアの楔形文字は、文字の内部に連結線となるような線を持っているが、その筆記の動作が線的ではないため野線を使用する人が多い。確かに葦の尖筆を横に寝かせて粘土の上に長い直線を書くのは非常に簡単な作業である。また、野線を先に書くことによって文字は書き易くなる。文字の内容よりも先に連結線の役割を持つ野線を書くという行為には、野線使用の慣習的な継続性という面もあるだろうが、線への集約の無条件な先行性の意味も込められている。古代エジプトの聖刻文字は、文字の内部に連結線となるような線を持たないため、野線の使用には特に必然性がある。これは筆記体である神官文字に関しても共通している。ただ、新しい民衆文字が使用される時代は、かなり文字内部に連結線の役割を持たせ

(38) 線的な牽引は、一旦生じた集積の場を単純化し、類似性の反復を招来する。複雑な文字が筆記体の中で単純化するに従って、元々別の文字が同一化していき、反復的な文字ができあがる。フェニキア文字やシリア文字は、古代メソポタミアの楔形文字や古代エジプトの聖刻文字を背景にして、その様な単純化を完成した。聖刻文字や漢字は、それとは逆に徐々に複雑化していった。これらは線の集積を複合させるような形態を持っているため単純に比較できない。いずれにせよ、線は一旦集積の場を複雑なものに保ち、そこから改めて単純化へと向かうことが分かる。この単純化は、筆記線の連続性への回帰であり、即ち言語的な差異の場をもう一度消去しようとする筆記線の回復という意味を持つ。これは一般に言われているような音声言語化或いは表音化という事態とは全く逆の非言語化の進化と見なす必要があるのである。この文字の見かけ上の表音的単純化は、従って言語的な動機による必然的な進化と見なすことはできない。むしろ、これは反言語的な過剰な線状性の飛躍である。

(39) 升目を一字づつ区切ってその中に文字を書き込む、日本の原稿用紙のような文字の書き方は、漢字のように切れ目がはっきりしている文字にしか使えない。漢字の内部を見ると、それ自体が集積の場の複合になっている場合がある。例えば「線」という合体した字と「糸泉」という分割した字とは、横書きにしたときに形態上の区別を持たない。縦書きの場合には区別が可能であるが、これと逆のことが、例えば「意」と「音心」という対比にはある。また横書きが右から左へ進む場合にも事情は変わってくる。

る傾向が現れてくる。罫線の消失は聖刻文字に対しても見られ、ロゼッタ・ストーンの聖刻文字には罫線は描かれていない(脚注40)。このように、罫線の使用には絶対的な必然性はないが、非常に多用される場合に共通する機能的な特徴は確かに確認できるのである。

罫線の使用から始まって、文字の連結線は文字の内部へと統合されるのであるが、そのような連結構造の単純化によって、文字の外的な形態は初めて自律的な線状性となる。この外的線状性は、文字の内的な線とは異なり、交叉、複合、接合によって集積することはない。外的線状性は、筆記線のような連続性を持たない。外的線状性の内部は一樣ではない。内的筆記線の内部は一樣でなければならなかった。筆記線が内部に変化を生ずると、差異へと回収される面の役割を持ってしまう。筆記線は、あくまでも差異の消去あるいは差異の回収の残余であるため完全に一樣である。そのため、筆記線は、交叉、複合、接合によってしか集積できない。しかし、外的な線状性は、内部に単なる差異ではない変化を内蔵している。集積の場を内部へと封じ込めることによって外的な形態は線状性として安定する。ただ、この内部への封印は微妙な均衡によって成り立っているものでもある。各々の集積の場は線状性の中の点をめざし、その面的な拡散の方向は連結線の方向へと接合される。つまり、線状性の内部では、点への端的な消滅と線への迂回的な消滅とが、差異への回収を巡ってせめぎ合っているのである。点への消滅の継起は、絵画的な場への集積として確認してきたが、もう一つの線的な迂回的消滅は、連結線の過剰な牽引によって線が単一化し、一本の線の中に変化が面的に封印されてしまうような方向をめざす。一本の線の内的な分節は、言語的な差異への還元を意味する。このような事態から、文字を音声言語的な線状性と判断させる傾向が生ずる。文字の表音化とはこのような事態を指すのであり、音声言語の分析による文字の創作といったような神話は、もしもその様な意図が確認できたとしても鵜呑みにはできない。文字の節目が音声言語の弁別単位と一致しているように見えたとしても、文字にとってその節目は全く異なった意味を持つ(脚注41)。文字にとってそれは修復すべき陥没点なのだ。文字はあくまでも時代的に先行する文字の流用であって合理的な進化ではない。外的線状性の過剰な牽引は、内的筆記線の集積の場を一見単

(40) ロゼッタ・ストーンは、聖刻文字、民衆文字、ギリシャ文字の対訳になっており、比較的新しい時代の文書である。そこでは、罫線を使用しないギリシャ文字や民衆文字の使用が、聖刻文字にも波及したと考えられる。また、紀元前十五世紀に使用されたウガリト文字は、粘土板に書かれた楔形文字であるが、罫線は使用されていない。ウガリト文字は、メソポタミアの楔形文字とは系統が異なり、いわゆるアルファベット文字であることが知られており、パピルスに書かれたアルファベット文字から粘土板へと逆に転化されて作られたのではないとも言われている。もしそうだとすれば、パピルス上の筆記体の連結性が外的な線の雛形になって、罫線なしに線状性を作ることができたとも考えられる。ただ、ウガリト文字の単純性そのものが罫線を必要としないという文字の形態上の類推も可能である。

(41) 文字の単純化によって生じた反復と、音声言語の単位の反復の使用との重なり合いは、後から対応が成立したのであるが、両者は別々の方向を向いているために、この対応は逆方向の分節となる。音声言語は小さな単位を大きな単位に統合する過程、すなわち弁別特性から音素、音節などの上位

純な差異の集合体へと引き延ばすが、実際には引き延ばされた線の中でも絵画的な集積の力は消えてはいない。それは複数の場を線的に統合して一つの線状の場に加工した連続体の形で現れる。文字のいわゆる表音化によって実際に生ずるのは、このようにして現れた線状絵文字である(脚注42)。

文字は以上のようにして外的な線状性の均衡状態を混交させることなく維持するのが理想の状態であり、そのような形態へと集約する傾向を持っている。しかし、このような傾向は、先にも述べたとおり、言語的な書き込みによってのみ生ずる。ただ、この言語的な書き込みは、音声言語の分析によって得られた様々な単位の転写によって始まるとは考えられないのである。このような単位との対応関係は、むしろ、単位と機能の考察で確認してきたように、固定性としての文字への、段階的な依存の枠組みに過ぎない³⁷⁾。言語的な書き込みとしての文字は、純粋な線描から始まり外的な線状性へと到る。その際に常に作用するのは、線への集約という傾向である。ただ、文字を線状性として確認するだけでは、文字の意味論は完了しない。外的な線状性には、更に線の分断と接合、線の折り畳み、線の末端部の処理、線の集蔵による面の構成、線の集蔵体と線との交換などの複雑な手続きが含まれている。差し当たって、ここで確認できたのは、確かに文字は線へと向かっているという点だけである。ただ、これによって、人為性と非人為性、文字と非文字という境界線の形はより明確になるだろう。

4.3 過剰な線状性

文字は線へと集約されるという傾向が確認できたが、このような傾向が言語的な差異への回収を線状性の上で正当化してしまうということも確認できた。また、このような回収に対して、線状絵文字という引き延ばされた線の集積が対抗することは、線状性の過剰な延長を示唆していた。この過剰な延長は、しかし、言語的な合理性にとって最後の克服すべき障害と写る。例えば、英語のラテン文字表記はこのような線状絵文字の典型的な事例である。このような線状絵文字の発生は、母音の線的な表記を開始したギリシャ文字によって開始されたもので

の単位を派生させる過程で、文字と出会う。それと同時に文字は大きな集積を小さな集積に縮減する過程、すなわち絵画的文字からより反復性の強い単純化文字を派生させる過程で言語と出会う。この両者の出会いは、一方が他方に、見かけ上の単位の同一性を依存する形で起こる。この出会いから文字の線状性は導き出せない。なぜなら、文字が元々単純化の方向に向かっているなければ言語の音声面と出会うこともないからだ。

- (42) 線状に引き伸ばされて連続した切片を絵文字というのは通常の絵文字の概念からは外れるが、元々絵文字を単なる筆記線の集積の場と考えれば、線状に引き伸ばされたものも絵文字である。一旦表音化したように見えないいわゆる表音文字の語表記が、発音とは違うものになってしまった場合は、それは絵文字への回帰と見なすしかない。なぜなら、発音と切り離された表記は、音声的に線状であるとは主張できないからである。それは、図柄として線状であるに過ぎず、しかも、単純化によって集積の場に節目を回復することができない。従って、その切片は内部に連続性を持った差異の場としてしか機能しなくなるのである。

ある。この線状絵文字は、ラテン文字表記に於いて一般的な、語を線の分断によって区切るという手法、様々な限定符、略号などの追加によって完全に定着した^(脚注43)。このような手法は、実際には線状絵文字を想定して使われているわけではなく、言語の分析により抽出した単位に対応させたことになっている。表音文字という理念が、単純化と普遍性を掲げて、実際には複雑で応用のきかない線状絵文字を多産させることになる。線状絵文字に相当するラテン文字表記の複雑さが、文字の学習をかえって困難にするということがしばしば指摘される。しかし、この線状絵文字は、実際には、全ての文字の使用に於いて普遍的に発生する過剰な線状性の事例に過ぎない。過剰な線状性は、線を限りなく延長させることにより、言語的書き込みと言語的読み取りを困難なものにする。面的な絵画は一目見れば様子が分かるが、線的な文字は端的な把握を拒絶する。線の内部を一度に見渡すことはできない。また線の全体を完全に見渡しながら書き込むことも實際上難しい。このような拒絶が、即ち線を固定性として守っている線状性の形態が持つ主要な属性である。

過剰な線状性は、差し当たって固定性としての文字が持つ全く独自の形態である。活動体としての言語は、その形態として線状性を持つことはない。それがあったはずの場所として理念的に想定されるような線状性が言語の線状性に当たるのであるが、その様な理念は、元々文字によって先取りされているのである。言語はむしろあったはずの線状性から遠ざかる傾向にある。それに対して、文字は逆に線状性へと常に集約される傾向にある。また、固定性としての文字が持つ線状性の形態は、過剰な延長へと常に開かれている。この開示性は単に線状性の未完了だけを表している。だが、過剰な延長は、文字の全体的な消費への欲動を常に含んでいる。文字の表音化という理念は、実際にはそれほど害をもたらさなかった。文字は画一化に向かうものであるが、これは文字が常に流用されるもので、合理的に創造されるものではないことから起こる。文字は必ず引き渡されることによって移植される。その方法論が伝播するのではなく、文字そのものが移動するのである。文字のどの部分に言語が対応するように見えるかは各場面に任せられるが、文字は常に元々あったものであった。文字は線描の段階から元々言語的書き込みであり、その時点で言語は文字へと奪われているのだが、言語は後から文字を

(43) ギリシャ文字に始まり、現在ではラテン文字を代表とする一連の表記は、それ自体では音節と語の分節を表記することができない。意味作用がそれらの分節を頼りに機能していることを考えると、いわゆる音素表記という主張には合理性がない。これらの表記は、結局音節を表記することは諦めて、語の分節を線状性の分断によって代行させる。また、文の分節、文の種類などを表す限定符、数字を表す表語文字、別の言語からの略号等、音素表記という主張からは外れる様々な付加記号を多数含んでいる。とりわけ、語の表記のために線状性を分断するような手法は、切断された切片を必然的に音声からも切り離されたものにしてしまう。線状絵文字の冗長さが、実際には非常に効率の悪い表記を産む。なぜなら、線状絵文字を頭の中で面と点との関係に読み換えるには、特殊な訓練が必要だからだ。

再び回収しようとする。読み取りと書き込みに於ける言語の対応は任意に行われるが、線状性そのものを破壊することは実際にはなかった。しかし、線状性の全体的な交叉、複合、接合が可能になるならば、線状性は危機を迎えるかもしれない。それは、線状性が自ら機能するようになる場面である。このような場面では、過剰な線状性をいかに停止するかが問題となる。筆記の線によって固定性は十分成立したのであるが、過剰な線状性を改めて固定性へと停止することがそこで必要となる。線状性の無限の延長は線状性の完了を意味する。線状性は無限に延長可能であっても、可能である状態を実現してはならないために、常に未完了なものとして追加され続けるのである。そして、この未完了の部分は常に他の線状性と隔離されていなくてはならない。この隔離の構造が次の段階で問題となるであろう。それは、文字の集積と集蔵の考察である。

5. あ と が き

文字は言語の記録であると見なされてきたが、書き込みと読み取りは必ずしも一致しないことが多い。また、読み取りのない書き込みの状態が、文字の主要な状態であるとも言える。このような固定性としての文字を、人為性の中で非文字から区別することが、言語を根拠に可能になるとは考え難い。とりわけ文字はその系統を画一的なものに集約する傾向がみられ、言語の多様な分化とは様子が違う。文字に対する言語の反映としてよく線状性が挙げられるが、書き込みと読み取りが分離している以上、線状性は言語の反映とは言い切れない。音声言語の使用は、二項対立による弁別機能の単位を複合させることによって非線状的に行われることが分かっている。その複合的な弁別は、更に意味の差異へと立体的に複合されていくのである。言語はまず発話の原点である発声の段階で、あったはずの線状性からむしろ離れていく。言語記号の使用は、形態と実質の二重性の中で関係性を張り巡らしていくことが分かっている。基本的な関係の構造は、その二重性そのものが表示機能を持った共示によって更に二重化する、三重の構造である。このような構造の段階的な拡張は線状性を持つ必要が元々無かった。実際に言語の線状性という認識は、単なる発話の単一性の認識でしかなく、それは相対的な位置の同一性に還元される。その様な場から導き出せる線は、情報伝達の図式の中の発信者と受信者を結ぶ線である。そして、受信を保留された伝達内容の描く線が、始めて見出される線であるが、その線は最早音声言語である必要がないだけでなく、保留されることによって過剰な線状性と化した奇妙な産物である。このようにして、實際上、言語は線状ではなく、線状性の理念からも遠ざかるものであることが結論付けられる。文字の筆記は具体的な線によって構成される。この際に線は背景に言語的な活動をもった集約である。この線は寄り集まって集積の場を作る。この集積はあくまでも線によって構成されているため線の先端部が有効になる。この先端部は、導入と脱出の各一本が残ったときに特に有効となる。この二本の線の末端が隣接領域

との連結を可能にする。文字の連結は、実際には線の複数の集積を囲い込む罫線の二本の延長線によって始まる。その二本の線は同一方向に重なり、一つの線として役割を共有する。筆記体の文字は、その二本の線を文字の内部で一本に統合する。文字はこのようにして一本の線状性として成立するが、その線状方向の過剰な牽引から言語との対応という虚構が生まれる。この虚構は文字を表音的なものに見せ掛けるが、実際には線状性の内部には引き延ばされた線の集積の場である線状絵文字が発生する。文字は言語に対抗して、その独自の形態である線状性を均衡状態に保とうとする。このようにして、實際上、文字は線から始まっており、独自に線状性へと集約していくということが結論付けられる。文字は言語とは独立して全く独自の線状性の形態を持っており、その進化の方向は言語の分析に左右されない。文字は、言語とは無関係に線状性の形態を展開させることが可能であるということになる。その場合には特に固定性としての文字の倫理学が要請されるであろう。

参 考 文 献

- 1) Leroi-Gourhan, André: *Le Geste et la Parole 1—technique et langage*, Albin Michel, Paris, 1964. (邦訳アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』荒木 亮訳, 新潮社, 1973年, p. 192)
- 2) Leroi-Gourhan: 1964. (邦訳 p. 189)
- 3) Cf. Leroi-Gourhan: 1964. (邦訳 p. 199-214)
- 4) Cf. Goody, Jack: *The Domestication of the Savage Mind*, Cambridge University Press, Cambridge, 1977. (邦訳 J・グディ『未開と文明』吉田禎吾訳, 岩波書店, 1986年, p. 138-148)
- 5) Cf. Derrida, Jacques: *De la grammatologie*, Les Edition de Minuit, Paris, 1967. (邦訳ジャック・デリダ『グラマトロジーについて—根源の彼方に』足立和浩訳, 現代思潮社, 1972年)
- 6) Cf. Saussure, Ferdinand de: *Cours de Linguistique Générale*, Payot, Paris, 1916. (邦訳フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳, 岩波書店, 1940年)
- 7) Cf. Pope, Maurice: *The Story of Decipherment from Egyptian Hieroglyphic to Linear B*, Thames & Hudson Ltd., London, 1975. (邦訳モーリス・ポープ『古代文字の世界』唐須教光訳, 講談社, 1995年, p. 82-114)
- 8) Cf. 高津春繁・関根正雄:『古代文字の解読』, 1964. p. 34-38
- 9) Jakobson, Roman: *Essais de Linguistique Générale*, Les Editions de Minuit, Paris, 1973. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳, みすず書房, 1973年, p. 57)
- 10) Pope: 1975. (邦訳 p. 61)
- 11) Bottero, Jean: *Mesopotamie*, Gallimard, Paris, 1987. (邦訳ジャン・ボテロ『メソポタミア』松島英子訳, 法政大学出版局, 1998年, p. 145)
- 12) Cf. Bottero: 1987. (邦訳 p. 151-154)
- 13) Jakobson, Roman: *Selected Writings I—Phonological Studies*, Mouton, 's-Gravenhage, 1962. (邦訳『ロマン・ヤコブソン選集 1』早田輝洋・長嶋善郎・米重文樹訳, 大修館書店, 1986年, p. 7)
- 14) Jakobson: 1962. (邦訳 p. 7)
- 15) Jakobson, Roman & Halle, Morris: *Phonology and phonetics in Fundamentals of Language*, Mouton, Hague, 1956. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳, みすず書房, 1973年, p. 83)
- 16) Trubetzkoy, N. S.: *Grundzüge der Phonologie*, Vandenhöck & Ruprecht, Göttingen, 1958. (邦訳『音韻論の原理』長嶋善郎訳, 岩波書店, 1980年, p. 5)
- 17) Trubetzkoy: 1958. (邦訳 p. 13)
- 18) Trubetzkoy: 1958. (邦訳 p. 16)
- 19) Trubetzkoy: 1958. (邦訳 p. 17)
- 20) Jakobson & Halle: 1956. (邦訳 p. 87)
- 21) Jakobson, Roman & Waugh, Linda: *The Sound Shape of Language*, Indiana University Press, 1979. (邦訳ロマン・ヤコブソン, リンダ・ウォー『言語音形論』松本克己訳, 岩波書店, 1986年, p. 36)

- 22) Jakobson & Halle: 1956. (邦訳 p. 86)
- 23) Jakobson, Roman & Gunnar, C. & Fant, M. & Halle, Morris: *Preliminaries to speech analysis—The distinctive features and their correlates*, The M. I. T. Press, Cambridge (Massachusetts), 1951. (邦訳『音声分析序説』竹林 滋・藤村 靖訳, 研究社, 1965年, p. 66-67)
- 24) Jakobson & Waugh: 1979. (邦訳 p. 25)
- 25) Jakobson & Waugh: 1979. (邦訳 p. 26)
- 26) Jakobson, Roman: *Six leçons sur le son et le sens*, Les Editions de Minuit, Paris, 1976. (邦訳ロマン・ヤコブソン『音と意味についての六章』花輪 光訳, みすず書房, 1977年, p. 137-138)
- 27) Cf. Jakobson & Waugh: 1979. (邦訳 p. 223-227)
- 28) Jakobson, Roman: *Essais de Linguistique Générale*, Les Editions de Minuit, Paris, 1973. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳, みすず書房, 1973年, p. 33 cf. p. 27-39)
- 29) Starobinski, Jean: *Les mots sous les mots—Textes inédits des cahiers d'anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Mouton, 1967. (邦訳ジャン・スタバンスキー『ソシュールのアナグラム・ノート』工藤庸子訳, 「現代思想」1980年10月号所収, 青土社, 1980年, p. 178)
- 30) Starobinski: 1967. (邦訳 p. 178)
- 31) Starobinski: 1967. (邦訳 p. 180)
- 32) Starobinski: 1967. (邦訳 p. 186)
- 33) Kristeva, Julia: *Σημειωτική—Recherches pour une sémantique*, Edition du Seuil, Paris, 1969. (邦訳ジュリア・クリステヴァ『記号の解体学セメイオチケ』原田邦夫訳, せりか書房, 1983年, p. 108-109)
- 34) Jakobson & Waugh: 1979. (邦訳 p. 44)
- 35) Cf. Barthes, Roland: *Éléments de sémiologie* (Communication N°4), Editions de Seuil, Paris, 1965. (邦訳ロラン・バルト『零度のエクリチュール 付・記号学の原理』渡辺 淳・沢村昂一訳, みすず書房, 1971年)
- 36) Cf. Eco, Umberto: *A theory of semiotics*, Indiana University Press, 1976. (邦訳ウンベルト・エーコ『記号論』池上嘉彦訳, 岩波書店, 1980年)
- 37) Saussure: 1916. (邦訳 p. 157)
- 38) Saussure: 1916. (邦訳 p. 158)
- 39) Saussure: 1916. (邦訳 p. 159)
- 40) Saussure: 1916. (邦訳 p. 165)
- 41) Saussure: 1916. (邦訳 p. 168)
- 42) Hjelmslev, Louis: *Omkring sprogteoriens grundlaeggelse*, Koebenhavn, 1943. (邦訳ルイ・イェルムスレウ『言語理論の確立をめぐって』竹内孝次訳, 岩波書店, 1985年, p. 59-60)
- 43) Hjelmslev: 1943. (邦訳 p. 71)
- 44) Hjelmslev: 1943. (邦訳 p. 122)
- 45) Hjelmslev: 1943. (邦訳 p. 122-123)
- 46) Hjelmslev: 1943. (邦訳 p. 135)
- 47) Hjelmslev: 1943. (邦訳 p. 136)
- 48) Peirce, Charles Sanders: *Collected papers of Charles Sanders Peirce*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge (Massachusetts), 1960. (邦訳『パース著作集 2』内田種臣訳, 勁草書房, 1986年)
- 49) Austin, J. L.: *How to Do Things with Words*, Oxford University Press, Oxford, 1962. (邦訳 J. L. オースティン『言語と行為』坂本百大訳, 大修館書店, 1978年)
- 50) Goody: 1977. (邦訳 p. 233)
- 51) Saussure, Ferdinand de: *Cours de Linguistique Générale (1908-1909) Introduction in Cahier Ferdinand de Saussure 15*, 1957. (邦訳フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義録注解』前田英樹訳, 法政大学出版局, 1991年, p. 58)
- 52) Saussure: 1957. (邦訳 p. 58-59)
- 53) Saussure: 1957. (邦訳 p. 59)
- 54) Jakobson, Roman: *Essais de Linguistique Générale*, Les Editions de Minuit, Paris, 1973. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳, みすず書房, 1973年, p. 268)
- 55) Jakobson & Halle: 1956. (邦訳 p. 85)
- 56) Cf. 古屋俊彦: 「文字の単位と機能」(国士館大学情報科学センター紀要第21号所収), 国士館大学情報科学センター, 東京, 2000.
- 57) Cf. 古屋俊彦: 2000.